
リリカルなのは 金色の男

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 金色の男

【Nコード】

N51350

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

青年は少女に再会した。

そして青年は再び戦う決意をする

第一話 戦士の覚醒

第一話 戦士の覚醒

海鳴市のあるスーパー。

「これと・・・これ」

この少女八神はやてはどこにでも居る普通の少女だが。両親は他界し自分自身も半身不随という状態であった。

「うんっしょつと」

はやてに家族は居ない。下半身が動かなくなっってから一人で生きていた。そしてスーパーの帰り道。はやてはあるレストランの前を通った。

「・・・ここ・・・よく来たなあ」

と両親の事を思い出しながら裏庭を通ったその時。

「わ!」

「あ!大丈夫!？」

菜園からはやてに水がかかってしまった。

「冷たあゝ」

「ごめんごめん！ん？はやてちゃん？」

目の前の青年ははやてを知っていた。はやての姿を見ると青年は笑顔になった。

「え？」

「あれ？覚えてないかな？よく食べにきてくれたじゃない！いらっしやいませ！」

「ああ！」

はやても目の前の青年＝津上翔一を思い出した。

翔一は、はやてが両親と通ってたレストラン『AGITΩ』のシェフである。

そして翔一ははやてに菜園の野菜を渡している。はやては久しぶりにあった友達が嬉しかった。

「よくしほらほらいっぱい持って帰れよ？はやてちゃんどうしたの？」

「うんちよつと・・・」

翔一から渡されたタオルで顔を拭いているはやて。そして思い切つて翔一に話してみることにした。

「そっか 大変だなーよし！俺がお手伝いさんで行くよ！」

「え？そんな良いよ！翔一君お店あるでしょ」

「何言つてんの。女の子の一人暮らしって危ないんだよ」

「はは・翔一君らしいわ・・・」

翔一の能天気さにちよつと呆れるはやて。だがこれが翔一のいいところでもある。

「あ！そうだはやてちゃんどうよこれ！」

物凄い曲がつたキュウリ出した翔一。

「・・・曲がつてる」

「この曲がり具合が良いんじゃない！後このツヤツヤ感とイボイボ感ね！ま！この辺は愛情が無いと出ないわけよ」

翔一はキュウリを拭くとはやてにさし出した。

「大丈夫！食べてみてよ！形は〴〵気に入らないかもしれないけど。キュウリはキュウリだからさ」

と翔一から渡されたキュウリ食べるはやて。

「あ！おいしい！」

「だろ！」

と言って翔一もキュウリを食べ始める。

「じゃ！今夜ね！」

と言って八神邸で家政婦になることになった翔一。

「ちょっと翔一君そんなことまでせんでええよ」

「もうちょっと待っててねすぐできるから」

レストランが終わるとはやての元で腕を振るっている翔一。

「うわゝ美味しそう」

「はは食べてみてよ」

「うん！」

と言って翔一の料理を食べ始めるはやて。

「美味しい〜やっぱ翔一君のご飯美味しいわ〜」

たまに人が食べたくなくなるような変な創作料理を披露する翔一。
普通の料理ははやてに好評だった。

「ありがとね。そういえばダンスが壊れてたから後で直しておくよ」

「おおきにな〜翔一君何でもできるんやな〜」

実は翔一が家政婦を始めた数日間八神邸の家具なりは翔一の修復を受けていた。万能人間のようです。

「そうや！翔一君また料理教えて」

「ああ！俺で良かったらいつでも良いよ」

「あ！普通の料理ね！」

ここ数日間翔一に料理を教えてもらっているはやて。ジャンルが多い為勉強必死です。

「じゃあまた明日ね」

「うん！翔一君気をつけてね」

翔一ははやてに手を振ると帰路に着いた。はやては翔一を見送ると

部屋に帰った。

「なんか良いな。家族がいるって・・・翔一君一緒に住めないかな」

等とはやてが思ったその時だった。

「え？」

突然部屋にあった鎖だらけの本が光り始めた。

『起動』

「え？え？」

はやての目の前で本が不気味な光を放ちながらはやての体を包んでいた。パニックに陥るはやて。

そしてはやての目の前に4人の人間が現れた。

「われら・・・主様に仕えますヴォルケンリッターでございます」

「あ~~~~~」

そのまま気絶してしまうはやて。

その時

「！！」

帰路についていた翔一が何かの気配を感じ取りはやての元に急いだ。

「！！」

翔一は何か様子の違う八神邸にたどり着くと急いでバイクから降りはやての部屋に向かった。

「誰が来る！」

金髪の女性の言葉に構えだす4人。

「はやてちゃん！」

翔一がはやての部屋のドアを開けると目の前の4人に驚いた。

「なんなんだあんた達！？」

翔一は目の前の黒装束のヴォルケンリッターを睨み付けた。

「そういう貴様は何者だ？」

「主の知り合いか？」

「主？つて！警察！ん！」

ピンクの髪的女性と巨大な男性の言葉に驚く翔一。

「はやてちゃん！」

はやての元に駆け寄る翔一だが。

「やめろ！」

ピンクの髪的女性シグナムの一閃が翔一を襲った。

「うああああ！！！」

二階の窓から叩き落される翔一。

「シグナム！」

「しまった！」

シグナムが慌てたと同時にまばゆい光がシグナムたちを包み込んだ。

「なんだ！？」

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、ヴォルケンリッターが窓から飛び降り翔一の姿を探すけどどこにも居ない。

「あ、あいつ・・・」

ヴィータのさした方角に何かが居た。

その姿は

金色の角

金色の胸

金色のベルト

赤い瞳

一人の戦士が立っていた。

こいつは危険だ

ヴォルケンリッターたちはそう思い目の前の戦士に襲い掛かった。

第二話 青の嵐

第二話 青の嵐

「てあああああああ!!」

ヴィータがグラーファイゼンを目の前の戦士に向かって振り下ろす。

「ふっ!はっ!」

ヴィータの攻撃を戦士はかわし続ける。その動きに隙が無い。

「くそ!舐めんな!!」

「く!はあ!」

戦士はヴィータの攻撃を防ぐと軽い力で突き飛ばした。

「うああ!」

ヴィータが吹き飛ばされるとシグナムが斬りかかった。

「はあ!!」

シグナムの動きに避ける戦士はベルトの左側を叩き付けた。

「なに?」

戦士の身体が青くなった。

「変わった？」

「は！」

戦士はベルトからロッドを引き抜くとロッドは展開した。

「武器を持った？」

「は！」

「く！」

戦士の攻撃を受け止めるシグナム。

「速い・・・それになんて技だ・・・」

シグナムの技と互角に戦う戦士。

「シグナム変われ！」

「ザフィーラ！」

戦士に殴りかかるザフィーラ。技が早いが力で押されてしまう。

「く！」

戦士は一端回避すると再び金色の姿に戻った。

「く！こころ変わるんじゃない！！」

ヴィータが加わり二対一になろうとしたその時。

シャキ

戦士の角が開いた。

「何をする気だ！」

「はああ・・・」

戦士の足元に巨大な紋章が描き出された。周囲の空気をまき込み威圧感で潰されそうになる。

「は！」

戦士が飛び上がりザフィーラに向かって襲い掛かった。

「はああ！！」

戦士の渾身のキックがザフィーラにヒットした。

「ぬおおおおお！！」

結界を張り必死に戦士のキックに耐えるザフィーラだが圧力で吹き飛ばされた。

「ぐはあ！」

「ザフィーラ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグナムたちがザフィーラに駆け寄る。その光景を見た戦士は何も言わずに去った。

「待て！！」

「逃げるな！！」

「待つて」

シグナムとヴィータが戦士を追おうとするがザフィーラの治療をしているシャルに止められてしまう。

「止めるなシャル！！」

「待つて・・・あの戦士より・・・さっき落ちた人を探さない」と

「く！」

シグナムは先ほど突き落とした翔一を探すことにしたのだが。

「居た・・・」

ちょっと離れた場所でのびている翔一だった。

「・・・ん・・・」

病院で目を覚ますはやて。何やら人がいっぱい集まっている。ヴォルケンリッター達の事が怪しいようだ。

「はやてちゃんあの人たちは？」

石田先生がヴォルケンリッターの事を気にかけてたその時だった。

「石田さん」

「あ・・・あなた津上さんのお友達の」

黒いスーツの男が石田先生に説明をし始めた。

（ん！この立派そうな人が翔一君の知り合い？）

とはやては驚いていた。

その説明で帰宅する事になったはやて達だが。

「あ！皆おかえりなさい！」

「翔一君！！」

八神邸で留守番していた翔一。ヴォルケンリッターのことを説明しようとするのだが。

「いや、俺知らなかったよ。はやてちゃんに外人の親戚がいたなんて」

「へ？それ誰にきいたん？」

「ん？シャルさんだけど」

翔一の天然さに救われるはやて。

「そつか、くん？ちょっと待って・・・あの病院に来た一誰？」

「うん知り合いの刑事さんだよ」

「なぬ！翔一君刑事さんと知り合いなの！！」

翔一の意外な顔の広さに驚くはやて。

因みに刑事さんは・・・

「はあ・・・津上さんも無茶なこと言うんだから」

とぼやいていた。

「えっとじゃあ自己紹介しようか。津上翔一です」

「シグナムだ」

「ヴィータだ」

「シャマルです」

「ザフィーラだ」

「いや、外国の人って変身できるんだな」

「（（（おいおい）））」

とヴォルケンリッター達は翔一のペースに乱されるのであった。

（賑やかになりそうや）

とはやては喜んでいた。

「ところであの戦士はどこに・・・」

「わからない・・・もしかしたら」

シャマルが翔一を見るが。

「なにかの間違いだろう・・・あんな奴が戦士であるわけが無い」

「それもそうね」

と云って戦士のことは保留するのだった。

第三話 赤の炎

第三話 赤の炎

翔一とはやて、ヴォルケンリッターの奇妙な生活が始まってから数日。翔一とヴィータは夕飯の買い物に来ていた。

「何にしようかな」

「翔一・・・変な料理だけは止めるよ・・・」

とヴィータにツツこまれながら到着したのは魚屋さん。

「おう！翔一！今日もいいのは入ってるぞ！」

「はい」

魚屋さんのススメで魚を選ぶ翔一だが・・・

「て！おい！」

「しい」

ヴィータが見ると事もあるうに翔一は魚の口に小指を突っ込んだ。衛生上こういうことはやってはいけません。

「やめろおお！」

とヴィータにハリセンをお見舞いされるが翔一は新鮮な魚を選んだ。

「あ！ヴィータちゃん。俺この後ちよつと用事があるんだ。はやてちゃんにちよつと遅れるって言うておいてくれないかな」

「ふゝんわかったよ。じゃあ先に帰ってる」

と翔一とヴィータは別れた。

「さてと」

翔一は一旦店の菜園から野菜を収穫するとバイクに積み込み喫茶店翠屋に向かった。

「こんにちは」

「あ！津上君！」

翠屋の店主高町士郎が翔一を迎え入れた。

「これ頼まれてた野菜です」

「いやゝいつもすまないな」

「いえ！好きでやってる事なので」

と他愛もない会話が弾むと・・・

「あれ？津上さん？」

と土郎の娘高町なのはが店に訪れた。

「やあなのはちゃん！」

「表のバイク津上さんのか？」

「うんあれ？なのはちゃんバイクに興味あったっけ？」

「え？あ！うんうん！私バイク好きだよ！」

と言ってなのはは大切にしているカメラを手にした。

「全く一文字の影響でな」

「？一文字？」

聞き覚えのある名前を聞いた翔一だが。

（なるほど。この間のテロ事件のときか・・・）

翔一の言うテロ事件とはPS事件時ショッカーライダー軍団の進撃だった。

「それにしても、なのはちゃんカメラなんて持ってたっけ？随分良
い奴みたいだし」

「これね・・・大切な預かり物なんだ」

「ふん」

となのははカメラを本当に大切にしているみたいだった。

「ところでお前家政婦始めたんだって？」

「ええ。ちよつと。あ！いけない！遅くなっちゃう！」

と言って翔一は八神邸に急ぐのだった。

夜

「不味い不味い！完全に遅刻だ！」

と必死にバイクを走らせている翔一だがその時・・・

「！！！」

翔一が何かを感じ取り気配のする方向へ向かった。

「これは・・・」

翔一が一定の距離を移動すると目の前に結界のようなものが張られていた。

「・・・」

バイクから降り翔一は手で壁に触れてみるとすり抜けた。

「よし！」

翔一は再びバイクに跨りその壁をすり抜けた。

(・・・ほう・・・結界をすり抜けるとは・・・)

翔一の姿を仮面の男が見ていた。

「ここは一体・・・ぐ！」

翔一は凄まじい頭痛に陥った。禍々しい気配に押しつぶされそうになる。そして翔一はビルを見上げた。

「え？」

翔一が見上げるとヴィータが空を飛び目の前の少女に危害を加えていた。

「あれは・・・子供？・・・なのはちゃん!!！」

翔一の視線の先には杖のようなものを持ったなのはの姿があった。

「なんでなのはちゃんが・・・!!！」

突然なのは胸から手が生えた。翔一は目の前で苦しむなのは姿に驚いていた。

「!?!」

翔一はヴィータ達を止めるべく力を引き出す動きをとった。するとベルトが現れ未知の力が発動する。

「変身!?!」

翔一がベルトの両端を敲き付けると姿とバイクが変わった。

「はあ!?!」

翔一はマシントルネイダーを走らせると飛び上がった。

「!?!」

するとマシントルネイダーが変形しスライダーモードになり滑空した。

「なに!?!」

ヴィータが振り向くとマシントルネイダーに乗った翔一が現れヴィータを突き飛ばした。

「仮面・・・ライダー?」

翔一の姿に驚くのは。

（違う・・・一文字さんじゃない・・・）

一文字ではない仮面ライダーに驚くのは。

「てめ！きやがったのか！」

ヴィータがグラーファイゼンで翔一に襲い掛かるが、翔一はその一撃を受け止めた。

「く！あいかわら　「ヴィータちゃん止める！」　なに！？」

ヴィータは目の前の戦士、翔一が自分の名前を知っていることに驚いていた。

「てめえ！なんであたしの名前知ってんだ！！」

「くー！」

ヴィータの攻撃を避け続ける翔一。

「てめえ！そいつらの仲間か！？」

「やめるヴィータちゃん！！何故なのはちゃんにこんな事するんだ！？」

「「え？」」

ヴィータだけではなく、なのはも驚いた。ヴィータにとっては目の前の戦士が、なのはにとっては見えず知らずの仮面ライダーが・・・なのはの名前を知っているからだ。

「ち！」

「く！！！」

翔一はひたすらヴィータの攻撃をかわし続けた。前回とは違い翔一が全く攻撃しない事がヴィータは気に入らない。

「舐めんじゃねえ！！ラテーケン！！！」

「ぐはあ！」

ヴィータのラテーケンハンマーをまともに受けてしまう翔一。

「この野郎！！！」

ヴィータが再びグラーフアイゼンを振り下ろしたその時マシントルネイダーが割って入った。

「なに！？！」

「は！！！」

翔一はマシントルネイダーに乗るとなのはを連れ離脱しようとしたその時。

「ておおおおおおお！！！」

「ぐあ！！！」

背後からザフィーラの攻撃を食らった。なのはを庇う様に翔一は着地する。

「ぐー！ザフィーラさん」

「・・・なに？」

ザフィーラは翔一の言葉に混乱している。

（二人ともどうしたの？）

（ああ！あいつがきやがったー！！）

シャマルの念話にヴィータが答えると・・・

（そうか・・・奴が来たか）

（シグナム？）

（奴と決着をつける）

（あー！シグナムちつくしょう！勝手にしやがれ！）

と念話が途絶えるとヴィータとザフィーラは倒れている翔一となのはに向かって構えた。

「悪く思つなよ・・・お前の魔力を頂く」

そう言って歩み寄った。その時ヴィータに閃光が放たれた。

「な、何だ!？」

閃光が晴れると、黒いバリアジャケットを身に纏った少女が立っていた。

『ふえ・・・フェイトちゃん!』

「・・・なのは」

フェイトはなのはにそう言って微笑むとヴィータに向かってデバイスを構えた。

「お前・・・そいつの仲間か？」

「・・・友達だよ」

ヴィータの問いにフェイトが答えるとなのはの前に倒れている翔一の姿を見て驚いた。

「仮面・・・ライダー・・・」

フェイトも翔一の姿に驚いていた。

(違う・・・お兄さんじゃない・・・)

フェイトも目の前の仮面ライダーが麻生ではない事に驚いていた。

「なのは!大丈夫?」

なのはが振り返るとその人物に安心した。

「ユーノ君！」

そしてフェイトがヴィータを見た。

「貴方は一体何者なんですか？」

「何で赤の他人に教えなくちゃならねんだよ！あたしは只お前等の魔力を頂ければそれで良いんだしよ」

「そんな事は・・・！！」

その時なのは達は物凄い気配を感じ取った。

「誰？」

「く！！」

その気配に向かって翔一が駆け出した。

「あ！待って！」

なのは達の言葉を聞かず翔一は屋上に向かって走るとある人物と対峙した。

「・・・やはり来たか」

「・・・シグナムさん」

「貴様何故私の名前を・・・まあいい・・・今度は逃がさん」

シグナムは翔一にレヴァンティンを突きつけた。傷付いたなのは達も居るこの状況では対決は避けられない・・・翔一も構えた。

「烈火の将・・・シグナム・・・貴様の名は？」

「・・・仮面ライダー・・・アギト・・・」

翔一は過去の世界で出会った戦士たちの名前の名乗った。

「アギトか・・・いい名だ・・・てあああああああ！！！」

シグナムの一閃を避ける翔一はベルトの右側を敲き付けた。すると翔一の身体が光り輝いた。

「く！青い姿か・・・」

シグナムはストームフォームだと思い構えるが翔一の姿は違った。

「なに？」

翔一がなった姿は赤く右腕が力強い姿フレイムフォームだった。まだ姿があつたことに驚くシグナム。

「は！！！」

翔一はベルトからフレイムセイバーを引き抜きシグナムに向かって構えた。

「剣だと・・・面白い・・・剣で私と勝負とはな」

レヴァンティンとフレイムセイバーが交差する。シグナムの騎士の太刀筋と翔一の侍のような太刀筋が交差する。

「く！はあ！！」

「は！は！」

五分の斬り合い。シグナム久しぶりに心躍っていた。

「中々やるな・・・アギト！」

シグナムはこの強い男を倒すべく必殺技の体制に入った。

（来るか！）

翔一も迎え撃つべく構えた。

「レヴァンティン！！」

「！！！」

シグナムと翔一は技の体制に入るとレヴァンティンからカートリッジがロードされフレイムセイバーは展開した。シグナムは懷に飛び込むべく急接近し翔一は迎え撃つべく居合いの構えを取った。

「紫電一閃！！」

「はああ！！」

シグナムの紫電一閃と翔一のセイバースラッシュがぶつかった。

「く！」

「ぐ！」

轟音と共にお互いの一撃必殺がぶつかるが反動で吹き飛んでしまった。

「くっ・・・やるな・・・」

「はぁ・・・はぁ・・・」

お互いに膝を突いていた。もうシグナムは戦えないそう思った翔一は・・・

「く！」

翔一はマシントルネイダーを呼ぶとそのまま飛び去った。

「逃げるのか！」

逃げる・・・その通りだが今の状態では翔一は離脱するので精一杯だった。

「はあ・・・はあ・・・」

しばらくバイクで走ると翔一は変身を解いた。

「く！なんでシグナムさん達が・・・」

とても優しい心を持ったヴォルケンリッター。翔一は何故皆があのような行動をとるか分からなかった。

正直、敵も味方も分らない。

だがヴォルケンリッターたちの行動にはわけがあるはず。

「痛たた。とにかくはやてちゃんのところに行かないと」

翔一は真実を知るため今の状態を保つ事にした。

第四話 緑の野生

アースラにてレイジングハートとバルディッシュが修理を受けていた。

翔一が撤退した後なのは達はヴォルケンリッターに襲われなのはリンカーコアを蒐集されてしまい、レイジングハート、バルディッシュが破壊されてしまった。

「バルディッシュ……く」

フェイトは悔しかった。麻生の力を込められたバルディッシュがいつも簡単に破壊されたことに……

「お兄さん……私はまだお兄さんの力を使いこなせていないんですか……」

フェイトは破損したバルディッシュを見つめていた。

一方

なのはは部屋で一文字のカメラを見つめていた。

「一文字さん……一文字さんならどうするの?」

物言わないカメラに向かって自問するなのは。

「けど……一文字さんなら……」

なのはは一文字のカメラを抱きしめた。

海鳴にて・・・

今日ちょっとした事で両親と喧嘩してしまったアリサ。正直どうでもいいことなのだが意地になっている。

「何で喧嘩しちゃったんだろ・・・あほくさ」

足の向くままフラフラ歩いていると何処かの駐輪場にたどり着いた。

「あ・・・」

何気なく見回すとアリサの目に一台のバイクが留まった。バイクで思い出す一文字の姿だが・・・今はもう居ない・・・

すると

「・・・なにしてる？」

「え？」

アリサが振り向くとバイクの持ち主と思われる青年が立っていた。

第四話 緑の野生

「・・・危ないぞ」

青年はぶつきら棒にそう言つとバイクに跨つた。アリサもどくが・

「・・・」

バイクがエンコしてしまった・・・

青年がバイクを分解し調べていると原因と思われるパーツを落としてしまった。

「・・・くそ」

青年の落としたパーツをアリサが拾つた。

「・・・これ」

「・・・ああ」

アリサからパーツを受け取る青年。見ると原因がわかり自分だけでは直せない。

路地

「もういい・・・バイク屋まで結構距離がある」

青年と一緒に壊れたバイクを引いているアリサ。

「・・・ありがとうな」

と言って青年は自販機からお茶を買うとアリサに渡した。青年も自分の分を買おうとするが小銭が無かった。すると・・・

「あ？」

アリサが自販機でお茶を買うと青年わたした。

バイク屋の休憩所でお茶を飲んでいる二人。

「何であんなところに居たんだ？」

「別に良いでしょ・・・」

「家出中って顔だな・・・」

「・・・ムカ」

青年に凶星を疲れてしまったアリサ。すると青年はお茶に口をつけた。

「運転手でも探していたか？・・・これ一本じゃ安いな」

「ムウ！」

「そんなむくれるな・・・礼だバイクが直ったら送ってく」

「ちえ」

ぶっきら棒にアリサは答えるのだった。

同刻八神家

翔一が家で家事労働に励んでいた。

「それにしても。皆そんなに疲れてどうしたの？」

「敢えてとぼける事にした翔一。」

「ホンマやで」

「面目ないです」

「はやてに謝るシャル。」

「それじゃあ俺はそろそろ」

「うんまたな翔一君♪私らお風呂は入ってくるわ」

「翔一覗くんじゃねえぞ」

「ちょっとしないよ!」

と反論する翔一。

「私は今日は遠慮しておこう・・・」

「めずらしいな・・・風呂好きが」

「そんな日もある・・・」

と風呂に入るはやて達だが・・・

「翔一?」

突然救急箱持っている翔一はシグナムの袖をまくった。

「貴様!」

「・・・やっぱり」

シグナムの腕に傷がついていた。

「全く。シグナムさんこんな傷じゃ痛いですよ」

シグナムを治療し始める翔一。

「傷は痛むものだ・・・」

「よしこれで」

包帯を巻き終わると翔一は帰宅するべく玄関に向かうが・・・

「貴様も傷を負っているな・・・」

「な！何言ってるんです？」

「匂いでわかる・・・」

シグナムに凶星を付かれる翔一。必死に笑ってごまかすがシグナムが翔一の袖をまくった。

「あー！」

「・・・この傷・・・」

翔一の傷は剣の傷だった。それも相当な使い手の物翔一がこんな傷を負っていること事態が異常だった。

「貴様どこでこの傷を負った」

「え？えと・・・そのバイクで事故っちゃって！あはははは！」

と言って翔一はシグナムから逃げ出した。

「・・・まさかな・・・あいつがそんなわけはない・・・」

シグナムある一つの可能性を思ったが否定することにした。

「危なかった！シグナムさん鋭い・・・」

翔一の受けた傷はシグナムの紫電一閃の傷だった。今バレてしまった。シグナムたちの本当の声が聞けないそう思っていた。

青年のバイクの後部座席に乗っているアリサ。一文字とは違う運転テクにちよつと不安を覚える。

「？」

青年がミラーを確認すると黒いリムジンが青年のバイクの後ろにぴつたりくっ付いた。

「なんだ？」

「逃げて！！」

「あ？」

「良いから逃げて！！！」

アリサの言葉にバイクを飛ばす青年。リムジンも青年のバイクを追う。

「もっと早く！お願い！！！」

「・・・・・・・・」

チエイスが繰り広げられると涼がブレーキをかけながら走り出した。

「えー!!」

アリサが振り向くと自分の座っている後輪部分から煙が噴出していた。煙幕となりリムジンを襲うとアリサたちはリムジンを巻いた。

公園の出店で焼きとうもろこしを食べるアリサと青年。

「バイク・・・運転上手だね・・・」

「普通だ」

「はーバイクのりって皆体育会系なのかな」

「???」

アリサの知っているバイク乗りとは一文字くらいだ。

「さっきの車ね・・・ウチの車なんだ・・・」

「・・・・・・・・」

青年は何も言わずとうもろこしに噛り付いていた。

「驚かないの？」

「なんとなくそんな気がした」

「なんで家出したとか聞かないの？」

「・・・・・・・・・・」

興味の無さそうな青年。

「無反応だね・・・けどそれも良いかも・・・どうしてこんな意地っ張りなんだろ」

アリサの思いを聞いた青年はメットを投げ渡した。

「え？」

「・・・帰るぞ・・・とつとと乗れ」

「む」

なんか面白くないアリサだが・・・青年はアリサの面倒を見ている。なんとなく懐いているアリサ。帰路に着く青年とアリサ。

「あんた・・・意地になったことある？」

「・・・ああ」

「・・・やっぱりそんな感じ」

「・・・放つとけ」

「ぷ！意地になってやんの！」

「黙らないと振り落とすぞ」

「はは！ごめんごめん」

等とバイクを走らせているその時だった。

「！！！」

魔力の閃光が走り青年がバイクを停めた。

「なに！？」

アリサが目丸くしていると青年は走り出した。

「ちょっと！どこ行くのよ！？危ないわよ！！」

青年が光の方角へ向かうとヴィータが立っていた。ヴィータは蒐集をしているところだった。

「なんだ？」

ヴィータが振り向くと青年と対峙してしまった。姿を見られたことに驚くヴィータ。

「・・・ガキ？」

青年の第一声に激怒するヴィータ。

「ガキ扱いすんじゃないやねえ！！まあいい！見られたからには痛い目見てもらうぞ！！」

ヴィータが青年に襲い掛かった。

「ち！」

青年は必死に避ける。ヴィータは青年の身のこなしに驚いていた。その身のこなしは正しく戦いをしてきた野生の動きだった。

「何なんだお前！？おりゃああああああああ！！」

魔力弾が青年に向かって放たれた。

「！！！」

青年は必死に避けるとアリサが駆けつけてしまった。

「なにやってんのよ！！」

「ち！」

ヴィータの魔力弾は青年諸共アリサに向かって飛んだ。

「うああああああああ！！」

「く！！！」

青年はアリサを抱き上げると回避した・・・このままではアリサが危ない・・・青年は逃げようとするがアリサが居るこの状況を打破するにはヴィータを倒すしかない・・・青年は意を決意した。青年はヴィータに向かって走った。そして力を引き出した。

「変身!!」

青年の叫びと共にもう一人の・・・緑の身体・・・獣のような姿の戦士が青年と共に走る。二人は徐々に重なり・・・青年・葦原涼の姿が変わった。

「う・そ・・・」

涼の姿が変わったことに驚いているアリサ。ヴィータも同じだった。

「グルアアアアアアアア!!」

姿が変わった涼がヴィータに襲い掛かった。

「なに!?!」

「グアアアアアアアアアア!!」

涼の咆哮に少し武者震いをするヴィータ。その野生的な動きに翻弄される。

「なんなんだ!?!なんなんだこいつ!?!」

「グルオオオオオオオオオオ!!」

ヴィータは知らない・・・この目の前の存在を・・・そして涼にアギトの姿を重ねた。

「調子に乗んなあああああ!!」

ヴィータはグラーフアイゼンをラテーケンフォームで振り下ろす。

「ぐーぐうううー!!」

ヴィータのパワーに圧される涼。腕からギルスフィーラーを引き抜きグラーフアイゼンを絡め取った。

「な! 離せ!」

「ぬううううううううー!!」

涼はグラーフアイゼンを掴んでいるギルスフィーラーに力を入れる。しかしヴィータの攻撃に翻弄される。このような敵と戦うのは初めてだった。

「なに・・・これ・・・」

アリスは涼の戦っている姿に釘付けになった。その姿は何処か悲しみを帯びている。何処か自分と同じ境遇を感じ取った。

「く・・・! ぬ!!! グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

アリスの目の前で涼が咆哮するとデモンファンングクラッシャーが開いた。すると涼のバイクの姿が変わった。ギルスレイダーが涼に向

かって走った。

「グルルル!!」

ギルスレイダーに向かって走るとそのまま跨った。

「な!」

ギルスレイダーに跨った涼に殴り飛ばされるヴィータ。

「ぐあああ!!」

バイクの動きでヴィータが再び翻弄された。

「オオオオオオオオオオオオ!!」

涼がバイクから降りると咆哮と共にかかとのヒールクロウが突き立ちそのまま飛び上がった。

「オオオオオオオオオオオオ!!」

ギルスヒールクロウがヴィータに向かって放たれた。

「ぐあああああ!!」

ヴィータはラテーケンハンマーで受け止めるが圧力で押しつぶされる。

「グルオオオ!!!!」

「うあああああ!!」

涼の咆哮と共に蹴り飛ばされるヴィータは必死に立ち上がった。

「く!・う・」

思ったほどダメージが少ないヴィータはすぐにわかった。

「てめえ!手加減しやがったな!!」

「・・・先に襲ってきたのはお前だ」

「この野郎!!」

(やめて!!)

「ん?シャル?」

ヴィータの頭にシャルの念話が響いた。

「くそ・・・わかったよ!!」

ヴィータは涼を睨み付けるとそのまま飛び去った。

「なんなんだあいつら?」

「あ・その・・・」

涼の姿を見て驚いているアリサ。当然である目の前の男が変身した。

涼は黙って去ろうとしたその時だった。

「ちょっと待ちなさいよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アリサの言葉で止まる涼。

「ここまで来たんなら最後まで送っていきなさいよ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

涼は変身を解くとバイクに跨りアリサにメットを投げ渡した。

奇妙な友情が芽生え始めた二人だった。

バイクに跨っている涼とアリサは無言だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

涼はアリサを家に送り届けた。アリサが執事の元に向かうのを見た涼はそのまま去った。

「・・・・名前聞くの忘れちゃった」

「・・・きっとまた逢えますよ」

アリサは奇妙な出会いをした涼との再会を望んだ。

そして涼もこの闇の書を巡る戦いに巻き込まれるのだった。

第五話 蒼の鎧

「人間が変身した？」

ヴィータが出会った戦士仮面ライダーギルスのことを考えていた。

「間違いねえ・・・あいつ人間から変身しやがった・・・姿もアギトに似てた・・・もしかしたらアギトも人間かもしんねえ」

ヴィータの言葉にシグナムは

（まさかな・・・）

剣の傷から一瞬、翔一がアギトではないかと思ったシグナム。だが同時に翔一がアギトであってほしくないとも思った。

（・・・奴は我々とは違う・・・普通の人間・・・戦いを知らない主の家族だ・・・奴がアギトだとしてもこのままで居てほしい・・・以前の私ならこんな事は思わなかっただろうな）

シグナムは翔一に不思議な感覚を覚えた。

第五話 蒼の鎧

朝

何やら外から金槌の音が聞こえてきた。

「ん？そついえば翔一の奴朝飯放つたらかして外で何やってんだ？」

ヴィータが朝ごはんを作っているはやてに言つと。

「ああ。翔一君ヴィータのベットが壊れたからって作ってるんや」

「……は？」「……」

普通なら買いに行くであろう……しかし翔一にとってはベットを作るなどお茶の子さいさいであつた。

八神邸庭にて

「氷川さんそれ取ってもらつて良いですか？」

「はい」

八神邸の庭で翔一と一人の青年がベットを作っていた。青年の名前は氷川誠、警視庁の刑事にして翔一の戦友である。何故警視庁の刑事が来たかというと翔一に呼び出されたからであつた。

「津上さん人使い荒いですよ」

「良いじゃないですか、氷川さん後でご馳走しますから」

物凄いデコボココンビであるが信頼関係は高い。

「じゃあそれ切ってもらって良いですか？」

「はいはい」

とつまらなそうに鋸で木材切ると

バッキン

鋸が折れてしまった。

「ああ。相変わらず不器用ですね」

「・・・不器用・・・」

氷川が翔一を睨んだ。その瞬間失言したと思った翔一。

「・・・ちょっと貸してください」

「いや良いですよ氷川さん無理しなくても」

「今のは鋸が悪かったんです・・・その鋸なら大丈夫のはずだ」

完全に意地になった氷川。

何だかんだ言っただけでベツトは完成するが・・・

「入らなかった・・・」

ドアに入らないベツト・・・翔一と氷川が再びベツトを分解し始めた・・・何だかんだ言っただけで息ピツタリの二人だった。

「そついえば氷川さんはやてちゃんのこと知ってたんですか？」

再びベットを組み立てている翔一。

「ええ。月村さんに聞きました」

「月村さんって・・・ああ！すずかちゃんか。ふゝんすずかちゃん何でも知ってるんだな」

「まさか津上さんが居るとは思いませんでした」

「俺も氷川さんが尋ねてくれるとは思わなかったですよ」

「こき使われますけどね」

「はははは」

「翔一君楽しそうだな」

「あ！はやてちゃん！」

翔一が車椅子に座ったままお茶を持ってきたはやてのお盆を取った。

「ちょっと無理しちゃダメだよ」

「だって翔一君とっても楽しそうなんだもん、それに刑事さんが友達なんてな、どうやって知りあったん？」

「・・・・・・」

言えない二人だった。翔一が作ったベットを見るはやて。

「それにしても・・・翔一君なんでも出来るんやな」

「これね。ヴィータちゃんに合わせて作ったからな、寝心地は保障するよ」

と言つて鼻をかく翔一。

「僕も手伝つたんですかね」

「はは！わかつてますよ」

「ええなあヴィータ。翔一君今度私にも作つて」

「良いよ」

と言うと翔一と氷川は出かけた。翔一のレストラン『AGITΩ』で食事を取る氷川。

「そついえば津上さん」

「なんですか？」

「最近またアギトになったみたいですね」

氷川の言葉に驚く翔一。

「え？何で知ってるんですか!？」

「ええ。津上さん時空管理局ってご存知ですか？」

翔一が考えたのはなのはと一緒に居た金髪の少女だった。

「……実は警視庁に時空管理局という人たちから接触がありました……アギトについて詳細な事を聞きたいと……」

「アギトに？」

「はい……もちろん警察にとってアギトの情報は極秘です……しかし……先日ハッキングがおきました」

「え？」

「幸い……アギトのデータはコンピュータに入ってはいませんでした……しかし」

「まさか！」

「はいG3のデータを見られてしまいました……これを期にまたG3ユニットが活動を始めるかもしれません」

「G3が……まさか氷川さんがはやてちゃんのうちに来たのは……」

「それは別です。流石にヴォルケンリッターの人たちを見たときは驚きましたが。今回はプライベートで来ました」

「プライベートって誰かに頼まれたんですか？あ」

「はい。月村さんに頼まれてまして」

「え？なんですか？」

「はやてさんが夜は1人で危ないからという事で夜見回ってくれないかと」

「へ」

とりあえず今後よる行動する時はやての元に氷川がいることに安心した翔一。

「俺からもお願いします」

「津上さん。僕に力になれることがあったらいつでも言うてください」

「ありがとうございます！氷川さんが居れば100人力です！」

「はい・・・ただ今はG3-Xはオーバーホール中です・・・しばらくはG3で戦うことになるかもしれません」

と氷川も協力してくれる事になり翔一の仲間が集いつつあった。

クロノがマンションでヴォルケンリッター、そしてアギトについて見ていた。

「ヴォルケンリッター・・・確かに彼女達については謎だが・・・この謎の仮面ライダー・・・洋さんじゃないのはたしかだ」

「ホントに海鳴ってよく仮面ライダー来るよね・・・まるで仮面ライダーのバーゲンセールじゃん」

エイミイの軽口が真っ当に聞こえてしまうほど海鳴に仮面ライダーが着ている。そして・・・

「これ警察のデータなんだけど・・・」

「これは・・・」

エイミイがデータを表示したのは警察の極秘データG3ユニットだった。

「仮面ライダー？」

「そう・・・警察が作り上げたアーマー・・・G3・・・」

「どうなっているんだこの世界は・・・」

と今更ながらクロノは仮面ライダーの事を不審に思うのだった。

夜の帰り道

『氷川さんありがとうございました』

「いえ・・・お安い御用ですよ」

とずかたと電話している氷川。

『はやてちゃんのことよろしくお願いします』

「はい。僕の友人もいますので彼と協力します」

そう言うとき氷川は電話を切るのだった。その時だった。

ズドン！

何かの爆発が起こり近くを通っていた氷川が急行した。

「なんだこれは？」

現場の廃工場に到着した氷川は明らかに人間の仕業じゃない爆発跡に驚いている。そして氷川は携帯を取った。

「尾室さん！」

『氷川さん？どうしたんですか？』

「G3を使わせてください！」

『え？どうしたんですか？』

「アンノウンかもしれません」

『へ？わかりました！』

電話を切る氷川。アンノウンではないと思うが・・・連日の翔一のアギトの出現にG3じゃないと対応できない・・・そう思った。

「酷い」

無人の廃工場とはいえ凄まじい爆発だった。氷川が調べると誰かが立っていた。

「誰だ！？」

「貴様は？」

氷川と対面してしまうザフィーラ。そしてザフィーラは人間に行動を見られては不味い。ザフィーラの人間の姿を見ていない氷川も目の前の人狼に驚いている。

「アンノウン？・・・違う・・・まさかあなたは・・・」

「ふん・・・見られたからには少し眠ってもらおうぞ」

そう言うとザフィーラは氷川に攻撃を仕掛けた。殺すつもりはないため手加減した攻撃だが人間を倒すのには十分だった。

「ぐ・・・」

まともに受けてしまう氷川は悶絶している。

「眠れ・・・」

ザフィーラが去ろうとしたその時だった。巨大なトレーラーが乗り上げた。

「なんだ？」

『氷川さん！氷川さん！』

トレーラーから声が響いた。その言葉に起き上がる氷川。

「お・尾室さん・・・」

『氷川さん！本庁の許可が下りました！！早くG3を』

「はい・・・」

氷川はGトレーラーに乗り込んだ。ザフィーラが撤退しようとしたその時。

ダン！ダン！ダン！

トレーラーの中から銃撃された。

「なんだ？」

ザフィーラが再び構えるとトレーラーの中から銃を持った青い鎧を着た戦士が現れた。

「・・・・・・貴様何者だ！・・・・・・仮面ライダーか？」

青い戦士は一言だけ答えた。

「ただの・・・・人間だ！」

氷川誠のもう一つの姿・・・・仮面ライダーG3がザフィーラに挑んだ。

「く！」

氷川がGM-01を撃ちつづけるがザフィーラは飛行し結界を張った。GM-01の弾丸を防いでいる。

「く・・・・人間の銃にしてはやるな・・・・」

ザフィーラが吼えるとG3は吹き飛ばされた。

「ぐああー!!」

G3は立ち上がると再びGM-01が火を噴いた。しかしザフィーラは弾丸を掻い潜り拳を入れた。

「ぬおおおおおおおー!!」

「ぐああー!!」

ザフィーラの拳を受けても氷川は立ち上がった。だがボロボロだった。しかしザフィーラは驚いていた。

「な・・・奴は本当に人間の装備か？」

G3はガードチェイサーの元に行くと装備を変えた。今の状態で最大の火力をぶつけるつもりだ。

『GM-01! GG-02! アクティブ!!』

GM-01にグレネードユニットGG-02を装着する。氷川はそのままザフィーラを砲撃した。

「ぬおお！」

先ほどとは違う砲撃をザフィーラは防ぎきれない。だがそれは一発目だけだった。

「く！」

氷川はGG-02を連射するがザフィーラは的確に防いでいる。そうこうしている内に弾丸が切れてしまった。

「しまった！」

「今だ！引かせてもらっぞ！人間！」

弾切れの氷川の間を突いたザフィーラが撤退する。飛行している為氷川は追撃する事ができない。

「くそ・・・」

悔しさをあらわにする氷川。そしてザフィーラを見送りながらG3

- Xのオーバーホールを待つのだった。

海鳴に集結した3人の仮面ライダー・・・各々の視点で彼らは何を見えるのか・・・

第六話 正体

レストランAGITΩにて

「シグナムさんお願いします」

「わかった」

シグナムがトレイに出来た料理を載せた。

「・・・お待たせしました」

食事を配るシグナム何故こんな事をしているかというと・・・

第六話 正体

3日前

いつものように夕食を作っている翔一にテレビを見ていたシグナムが・・・

「え？うちで働きたいって・・・どうしたんですか？」

「ああ、お前には世話になっている・・・少し手伝わせてくれないか？」

「んゝ良いですけど・・・シグナムさんに出来る事うゝん」

と翔一が閃いたのは・・・

「じゃあシグナムさんウェイトレスさんやりませんか？」

「ウェイトレスって・・・あれか？」

シグナムが今テレビでやっているメイド喫茶の映像を翔一に見せた。

「いや・・・流石にあんなのじゃないですよ・・・お店の雰囲気合わないで・・・」

「よかった・・・流石の私もあの格好には抵抗がある・・・」

「は〜」

と言ってレストランAGITΩに着た翔一はシグナムに制服を渡した。

「以外にシンプルなんだな」

「早速着替えちゃってください」

「わかった」

と言ってシグナムはブラウスとベストをベースにした制服に着替えた。

「これでいいのか？」

「ええ！お似合いです♪」

「そ・そうか？」

意外な言葉にちよつと照れるシグナム。

「それじゃあ練習しましょうか」

と言って翔一のスパルタ的指導が始まった。

「い・いらつし・・やい・・ませ・・」

なれない事で顔が引きつるシグナム。

「ダメですよシグナムさん。もうちよつと笑顔で」

「あ・あああまり慣れなくてな」

慣れないシグナムを必死に指導する翔一。

そして現在に至る。

「シグナムさんありがとうございます！」

「いや・・いつも世話になっているからな」

「ははは」

と言って笑っている翔一だがシグナムにはもう一つの目的があった。

（奴と一緒に居れば・・・奴がアギトかどうかはつきりする・・・あの剣の傷そして私達のことを知っている素振り・・・はつきりさせたい・・・そして願わくば奴がアギトではない事を・・・）

そう願うシグナムだった。

夜になり営業終了しシグナムは翔一のバイクの後ろに跨った。

「早く帰ってはやてちゃんに夕飯作らないと」

「そうだな・・・！！・・・停まってくれ！！」

「はい？」

シグナムの言葉に翔一はバイクを停めた。

「どうしたんですか？」

「翔一・・・すまないが先に帰ってくれ・・・」

「え？シグナムさん？」

翔一の言葉を聞かずシグナムは駆け出してしまった。その時・・・

「！！」

翔一がただならぬ気配を感じ取った。

「……まさか」

翔一はシグナムが向かった方角にバイクを飛ばした。

一方シグナムは騎士甲冑を装着しヴォルケンリッターの増援に参上した。フェイトと対峙するシグナム。

「!!」

フェイトはシグナムに向かってバルデツシュを構えた。

（早く終わらせて……主と……翔一と夕食だ）

シグナムはフェイトに向かって斬りかかった。

バイクを走らせる翔一は力を引き出す動きをとった。

「変身!!」

ベルトが輝くと翔一とバイクの姿が変わった。

「あれは!」

翔一がみるともう戦いが始まっていた。なのはとヴィータ、フェイトとシグナム、アルフとザフィーラ。

「え!!」

その時翔一は何かを感じ取りマシントルネイダーをスライダーモードにし飛んだ。翔一が駆けつけるとクロノがシャルルにデバイスを突きつけていた。

「やめてください!!」

翔一がクロノとシャルルの間に割って入った。シャルルは庇われた事に驚きを隠せない。そしてクロノもだった。

「く!お前は敵なのか!? 味方なのか!?!」

クロノの疑問にはもつともだ。シャルルもそれをはっきりさせたかった。

「・・・俺は・・・俺は友達だ!」

「「え?」」

クロノとシャルルは驚いている。

（守護騎士の友達?）

（この人が・・・友達?）

その時だった。

「待て!!」

GM-01を構えた氷川が増援で現れた。

「仮面ライダーが・・・二人・・・」

氷川が増援に驚くシャマルとクロノ。

「は！！氷川さん！」

「！！津上さん！」

「え？津上って・・・」

氷川から放たれた『津上』という言葉に驚くシャマル。

「まさか・・・あなたは・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シャマルの言葉に翔一は何も言わない。

その時翔一と氷川、クロノが蹴り飛ばされた。

「ぐあ！」

「えあ！」

「あ！」

クロノは気絶し翔一と氷川は体制を崩した。目の前に居たのは仮面の男だった。

「誰だ？」

「く！」

氷川が男にGM-01を発射するが男は防いだ。

「・・・あなたは？」

仮面の男にシャルは警戒している。アギトやG3のように妨害しない為敵ではないかもしれない。すると男は一言言った。

「・・・使え」

「？」

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

「・・・でもあれは」

「使用したページはまた増やせばいい・・・仲間がやられてからでは遅かるう？」

「！！」

確かに今の状況を打破するには闇の書を使うしかない。だが使えば仲間はとうなる・・・シャルはそのことを考えた。シャルは決意した。

（みんな！今から結界破壊の砲撃を撃つわ！！うまくかわして撤退を！！）

（（（おう！！）））

「あれは！！」

上空に物凄いエネルギーを感じた翔一と氷川。

「闇の書よ・・・守護者シャマルが命じます・・・眼下の敵を打ち砕く力を・・・今・・・ここに！！！」

シャマルの声でエネルギーが地上に向けられた。

（あんなもの撃たれたら・・・シグナムさん達は・・・なのはちやん達が！！）

翔一は力を解放する決意をした。

「氷川さん・・・ここは俺に任せてください」

「津上さん！どうするつもりですか！？」

「あれを止めます」

そう言う翔一はマシントルネイダーを呼び出し射線軸に立った。

「津上さん！！」

砲撃と対峙する翔一はベルトの両端を敲きつけると凄まじい炎が吹き出した。

「はあっ!!」

「なに!?!」

シグナムは翔一の姿に驚いた。その姿は凄まじい豪腕にして頭部まで変わっている。バーニングフォームが立ち上がった。

「ぬうううううううう!!」

翔一の拳に炎が圧縮される。砲撃と真つ向勝負に出る。そして砲撃が放たれた。

「はああああああああ!!」

翔一の拳バーニングライダーパンチが闇の書の雷とぶつかり合った。

「うわああああああああ!!」

雷に吹き飛ばされる翔一。その時不思議なことが起きた。

「え?」

シャマルの手にしていた闇の書のページが物凄い勢いで埋まっていた。翔一のエネルギーを吸収したからだ。

「ぐああ!!」

グランドフォームに戻ってしまう翔一。

「津上さん!!」

「く!!」

「シグナム!!」

撤退しかけてたシグナムがヴィータの制止を振り切り翔一の元まで飛んだ。

「!」

シグナムは翔一を抱きかかえるとそのまま飛び去った。

「シグナム・・・あいつどういふつもりだ?」

「ヴィータちゃん・・・今はシグナムの思うようにさせて?」

「え? シャマルどうしたんだよ?」

（あの人は・・・あの人は・・・）

シグナムの行動を黙ってみているシャマルだった。

安全な場所までたどり着きシグナムは翔一を下ろした。すると力が

拡散し翔一は元の姿に戻った。

「・・・やはり・・・く」

そうであつて欲しくなかった・・・必死に誤魔化してきたがシグナムはアギトが翔一だと認識してしまう。

「ん？あ・・・」

翔一がぼんやり目を覚ますと公園のベンチだった。頭には枕代わりにカバンが敷いてあつた。

「ここは・・・海鳴公園？」

「気が付いたか？」

「え？」

シグナムが温かいコーヒーを翔一に渡した。翔一は無言で受け取りコーヒーを飲むがシグナムの表情にただならぬものを感じた。

沈黙が流れるがシグナムが口を開いた。

「・・・翔一・・・頼む力を貸してくれ」

「え？」

「このままでは・・・主が死んでしまう」

「どういう・・・」

「このままでは・・・主は闇の書にリンカーコアを侵食され・・・死ぬ」

「!..!」

その言葉に絶句する翔一。

「・・・本当なんですか」

「主を救う為に・・・頼む」

シグナムの必死の願いだが翔一は・・・

「・・・それで・・・本当にはやてちゃんが喜ぶんですか・・・」

「なんだと・・・」

「はやてちゃんが・・・あなた達がそんなことをしている事に喜ぶと思っっているんですか」

「・・・貴様に何が分かる」

「わかりません・・・けど・・・俺ははやてちゃんの気持ちを守りたい」

「・・・そうか・・・やはり・・・合いまみえぬ者が・・・」

シグナムはレヴァンティンを翔一に向けた。

「・・・シグナムさん」

「構えろ・・・貴様は強い・・・こちらも手加減はしない」

フェイトとの戦いでボロボロの状態だがシグナムの身体が燃え上がった。翔一も力を引き出す動きを取った。

「・・・・・・・・変・・・・・・・・身!!・・・・・・・・」

翔一の身体が金色に輝くと姿が変わりシグナムも騎士甲冑を装着した。目の前で初めて変身した二人。

「アギト・・・私が勝ったら・・・私に協力しろ・・・」

「え？」

「・・・力ずくでも・・・お前を・・・行くぞアギト・・・いや！翔一！」

シグナムはレヴァンティンを翔一に振り下ろした。

第七話 もう1人のアギト

第七話 もう1人のアギト

「はあああ!!」

「く!!」

シグナムの一閃をかわし続ける翔一。

「逃げるな・・・翔一!!」

シグナムの剣には迷いがあった。翔一はそれを受け止めるべくベルトの右側を敲き付けた。

「は!!」

フレイムフォームに変わりベルトからフレイムセイバーを引き抜いた。

「たああああああ!!」

「は!!く!!」

シグナムの剣を受け止める翔一。だがシグナムの攻撃が素早いため不利になり始めている。防御力で受け止めているが翔一の一閃がシグナムを捕らえることが出来ない。

「く!!は!」

翔一はベルトの左側を敲き付けストームフォームになりストームハルバートを引き抜いた。

「はあ!」

「く!ぬう!!」

ストームフォームの動きに翻弄されるシグナム。だがレヴァンティンで丁寧を受け止めた。そして一端距離を置きミドルレンジを取った。

「!!飛竜一閃!!」

シグナムの一閃を避ける翔一は再びグランドフォームになった。

「く!」

翔一は決める気だ。

（あのキックか!）

シグナムはザフィーラを倒したライダーキックに迎え撃つべくおのれの最大の技に入った。

「あれは!」

シグナムはレヴァンティンと鞘を合体させ最大の技・・・ボーゲンフォルムにした。

シャキ

翔一もクロスホーンを展開し大地に巨大な紋章を浮かび上がらせた。

「行くぞ・・・翔一！！・・・翔けよ！！隼！！」

「はっ！！はああああああああ！！」

シュツルムファルケンとライダーキックがぶつかり合う。凄まじいエネルギーのぶつかり合いに周囲の物が破壊されていく。

「くうううう！！」

「ああああああ！！」

力と力のぶつかり合い。翔一とシグナムは自分の心に従い全ての力を込めた。

「ああああああ！！」

物凄い爆発が起こり二人は吹き飛ばされ相打ちになった。既にボロボロの状態だったため更に身体が傷ついた。まともに動ける状態ではない。

「ぐは・・・あああ！」

「ぐううううう！！」

蹲っている両者・・・だがシグナムは執念で立ち上がりレヴァンテ

インを翔一に向けた。

「・・・し・・・翔一・・・お前を倒し・・・お前を・・・う！」

「シグナムさん！！」

翔一が痛む身体に鞭を打ち、倒れるシグナムに駆け寄ろうとしたその時だった。

「！！！」

「！！！」

禍々しい気配を感じ取った翔一とシグナム。

「あれは・・・」

翔一とシグナムの視線の先にいたのは・・・死んだはずの男だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は何も言わずに翔一の前に立ちはだかった。

「木野・・・さん・・・」

「なに？」

翔一の目の前に現れたのはかつてアンノウンとの戦いで命を落とした男木野薫・アナザーアギトだった。

「木野さん・・・どうして」

「邪魔だ!!」

木野が翔一を一撃で吹き飛ばした。

「ぐああああ!!」

「翔一!ぐは!!」

木野はシグナムの首を掴みあげた。宙吊りになるシグナム。

「ぐは・・・あ・・・」

「消える・・・闇の書の残響!!」

木野がシグナムを絞め殺そうとしたその時。

「たああ!!」

「ぐ!!」

立ち上がった翔一が木野に一撃を加えシグナムを解放した。

「ゲッホゲッホ!!」

「シグナムさん大丈夫ですか!?木野さんどうして!!」

「邪魔をするな・・・闇の書の欠片は・・・破壊する」

対決は避けられない。翔一は意を決するが今の状態ではバーニングフォームになれない。そして・・・

「てあああああ!!」

シグナムがレヴァンティンで斬りかかるが木野は受け止めシグナムのレヴァンティンを叩き落した。

「く!!」

なす術のないシグナム。

「ふん!!」

再び木野のパンチがシグナムに振り下ろされると翔一が受け止めた。

「翔一!!」

「邪魔だ・・・どけ!!」

「ぐあああ!!」

翔一は吹き飛ばされながらも再び立ち上がりベルトを敲き付けた。すると3つの光が放たれた。

「あの姿は・・・」

シグナムは驚愕した。グランドフォーム、ストームフォーム、フレイルフォーム3つの力が一つになったトリニティフォームになった翔一。

「シグナムさん!!」

翔一はベルトからフレイムセイバーを引き抜くとシグナムに向かって投げた。

「く!!」

シグナムは咄嗟にフレイムセイバーを受け取り木野に向かって斬りかかった。翔一もストームハルバートを引き抜くと木野に向かって斬りかかった。

「く!!」

2対1の戦いになる木野だがそれでも互角に渡り合っている。

「一か八か・・・翔一!あわせろ!!」

「はい!!」

シグナムはレヴァンティンを拾い上げると二刀流の構えを取った。レヴァンティンからカートリッジがロードされフレイムセイバーは展開した。

「はあああ・・・」

翔一もクロスホーンが展開し大地に巨大な紋章が浮かび上がる。

「ふん!!」

木野の口のクラッシャーが展開すると翔一と同じ巨大な紋章が浮か
び上がった。

「二刀一閃!!」

「はああ!!」

シグナムのレヴァンティンとフレイムセイバーの一閃。翔一のライ
ダーシュートが木野に襲い掛かり、木野もアサルトキックで迎え撃
つ。

「くうう!!」

「はああああ!!」

「ぬうううう!!」

「「あああ!!」「」

力のぶつかり合い倒れる両者。だが・・・

「・・・時間切れか」

「え？」

翔一が木野の姿を見ると木野の身体が透け始めた。

「・・・今は預けといてやろう」

「木野さん!!」

翔一が叫ぶと木野の姿が消えた。そして変身を解除する翔一とシグナム。

「・・・翔一・・・今は一体・・・」

「・・・わかりません・・・どういう事だ？」

ただ啞然としている翔一とシグナムだった。

第七話 もう1人のアギト（後書き）

仮面ライダーアギト

「力を貸せ！翔一！！」

「はやてちゃんを助けるのに別の方法はないのか・・・」

「・・・私は人を犠牲にしてまで助かりたくない」

「どんなに惨い事でも・・・俺ははやてちゃんの心を裏切ることが出来ない！」

目覚めろ！その魂！！

第八話 翔一の答え

「・・・調子は？」

「まあまあだ・・・」

「私の目的は闇の書の封印・・・」

「封印ではダメだ・・・闇の書は破壊するべきだ」

「だが再生してしまう」

「塵一つ残さなければ消滅する」

「・・・その為に君に仮初とはいえ命を与えた・・・期待しているぞ木野君」

「ふん」

第八話 翔一の答え

八神邸

「・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

会話が弾まずギクシャクしている翔一、シグナム、シャマル。その様子をはやて、ヴィータ、ザフィーラが見ていた。

「翔一君達なにかあったん？」

「いや・わかんねえ」

「いったい？」

ひたすら家事をやっている翔一。何かに没頭していれば気が紛れるからだった。

その後

「翔一さん・・・力を貸してください!!」

「翔一！力を貸せ!!」

「俺は・・・」

はやての症状に気づかなかった翔一。シグナムとシャマルが必死に頭を下げた。

「止めてください!!」

「どうして！翔一さんはやてちゃんが死んでもいいの！！？」

「くー！」

確かにはやてを見殺しにすることは出来ない・・・だがその為に人を襲って良いのか？

「・・・しばらく・・・考えさせてください・・・」

翔一はこの答えを保留にするのだった。

そして今に至る

（・・・はやてちゃんを救うのに・・・他の方法はないのか？）

答えが見つからない翔一。

（出来ない・・・俺は・・・はやてちゃんと皆を天秤にかけるなんて・・・）

出来ることなら翔一も協力したい・・・だがそれで救われてはやてが喜ぶのか？・・・ただ力を貸すだけが答えなのか翔一は悩んだ。

シグナムたちが蒐集に出かけている間はやての部屋で手品を見せる翔一。久しぶりの時間だった。

「ええつとね〜これこうやって〜こう切って・・・」

翔一が縄を使ってハサミで切っている。はやては真剣に見ていた。

「こうやって・・・ほら繋がった!!」

「すっごい!!」

切った縄を繋げた翔一。はやては驚いていた。

「翔一君いつも楽しませてくれるなあ」

「えっへん!」

そう言つて翔一は鼻をかいだ。

「そついえば翔一君いつも何処におるん?」

「え?どうしたの?」

「なんか最近皆おらんようになって・・・なにしてるんやろ」

「うゝんなんだろうね〜」

敢えてとぼけている翔一。

「・・・ねえ翔一君」

「うん?何?」

「今日はウチが寝るまで一緒に居て・・・」

すると翔一は笑顔で答えた。

「うん！良いよー！」

「ありがとう」

そう言うとはやてはベッドに伏せた。

「なあ翔一君」

「うん？どうしたの？」

「もし自分の命が危ないとき・・・人様に迷惑かけてたら助かるって思ったら・・・どう思う？」

「え？」

「・・・私は・・・人を犠牲にしてまで助かりたくない」

「・・・はやてちゃん」

「あれおかしいな・・・なんで翔一君にこんな話したんやろ・・・おやすみ」

「うん・・・お休み」

「スー・・・スー・・・」

はやての寝顔を見守る翔一。久しぶりに穏やかな顔のはやてだった。

「はやてちゃん・・・気持ちよさそうに寝てる・・・」

と翔一がベッドから離れようとする

眠っているはずのはやてが翔一の手を掴んだ。

「はやてちゃん・・・」

「・・・1人は・・・嫌」

「え？」

はやての寝言に驚く翔一。

「1人は・・・嫌・・・1人は・・・」

翔一は静かにはやての手を両手で握った。

「大丈夫・・・俺はここにいるよ・・・俺はここにいるから」

するとはやての寝顔が安らかになった。

「はやてちゃん・・・」

翔一がはやての手を握っているとはやての手は震えていた。

（・・・まさか・・・はやてちゃん気づいているんじゃない・・・）

はやての本当の気持ちを知ってしまった翔一は決意した。

（・・・俺が守らなくちゃいけないのは・・・）

「シャマルさん・・・聞こえてたら・・・俺を連れてってください」

翔一はシグナムたちが向かった世界に行くのだった。

異世界

ヴォルケンリッターが魔導生物に攻撃を仕掛けている。

「はあ！！たああ！！」

龍を思わせるモンスターにシグナムが斬りかかった。

「はああ！！うああああああ！！」

「シグナム！！」

シグナムが吹き飛ばされる世界を超えてきた翔一がシグナムを受け止めた。

「翔一！」

「なんで・・・翔一が・・・」

翔一が現れたことに驚くヴィータ。

「翔一・・・力を貸してくれるのか・・・」

手を差し出すシグナムだが・・・

「・・・俺は・・・俺は！！」

シグナムの手を払いのけてしまった翔一。

「翔一！」

「シグナムさん・・・ごめんなさい・・・どんなに間違っても・・・どんなに惨い事でも・・・俺は・・・はやてちゃんの心を守りたい！」

翔一が力を引き出す動きを取った。

「変身！」

翔一の身体が光り輝き金色の姿になった。

「・・・翔一」

「！！そんな！翔一が！！」

「なに！？」

ヴィータ、ザフィーラの目の前で変身した翔一。その時だった。

「それが・・・お前の答えか・・・翔一」

「はい・・・俺ははやてちゃんの気持ちを守ります・・・そしてはやてちゃんを救ってみせます！！」

翔一の曇の無い眼を見たシグナムは・・・

「・・・わかった・・・お前はお前の道を行け・・・私は私の道を

行く・・・だが邪魔をするなら!!」

シグナムは翔一にレヴァンティンを向けた。

その時。

「!!」

途轍もない気配に押しつぶされそうになる翔一達。

「!!」

「はああ!!」

途轍もないエネルギーを纏った木野のキックがシグナムたち炸裂した。

「みんな!!」

翔一が木野の攻撃を受け止める。

「木野さん!!」

「・・・邪魔だ」

「ぐはああ!!」

「翔一!!」

ヴィータの叫びもむなしく吹き飛ばされる翔一。

「おめえ一体！」

「く！」

「闇の書・・・悪いが貴様らには消えてもらおう」

「てめえ！」

「止めるヴィータ！お前の敵う相手じゃない！！」

「・・・ここは俺に任せてください！！」

「翔一？」

翔一が木野の前に立ちはだかると・・・緑の旋風が舞い降りた。

「グルアアアアアアアアア！！」

「あいつ！！」

木野に襲い掛かる涼。ヴィータは涼が現れたことに驚いていた。

「葦原さん！！」

「おい！何で木野が生きてるんだ！？」

「わかりません！けど！！」

「ほう・・・お前も俺の邪魔をするのか？」

木野が再び襲いかかろうとしたその時。

ダン！ダン！ダン！！

「！！」

銃弾が発射された。木野が咄嗟に避けた。

「貴様は！？」

「津上さん！葦原さん！！」

「氷川さん！！」

「氷川！！」

増援に駆けつけた氷川。

「氷川さんどうして此处に！？」

「シャマルさんが案内してくれました！！」

3人の仮面ライダーが揃った。

「面白い・・・3人まとめてかかって来い！！」

4人の仮面ライダーは対峙した。

第八話 翔一の答え（後書き）

燃え盛る空港の中・・・

少女が1人彷徨っていた。

「お父さん・・・お姉ちゃん・・・痛いよ・・・熱いよ・・・こんな
ヤダよ・・・お家に帰りたいよ・・・」

炎の中少女は孤独に歩いていた。

「誰か・・・誰か！！助けて！！」

少女に向かって女神像が落ちてくる

「う！！！！」

絶体絶命のその時

黒い影が舞い降りた。

「トア！！」

「え！！」

黒い身体の方が少女を守った。

第九話 激突！四人のライダー

第九話 激突！四人のライダー

「は!!」

氷川がGM-01で木野を牽制すると木野は回避し、涼がギルスフイーラーで攻撃するが木野のカウンターを食らい、翔一が飛び掛るが叩き落された。

「ぐ!!」

「おい!なんなんだ!?!」

「木野さんの力が前より上がってる」

木野の戦闘能力に驚く3人のライダー。アギトの力だけでも強大だった木野、だが新たな力を感じる。

「・・・ふん・・・」

木野の拳から未知の力が沸きあがり翔一たちに向かってエネルギーが放たれた。

「く!!」

三人のライダーは咄嗟に避ける。木野の力を見たシグナムたちは驚いていた。

「あれは・・・魔力？」

「まさか!!」

シヤマルが探ってみると木野の身体は魔力体で構成されていた。

「あの人は・・・魔力で再現された人」

「え？」

「あの人の身体は・・・魔力で再生させて無理矢理生命活動されている」

その言葉に絶句するシグナムたちだった。

「ぐあああ!!」

木野に吹き飛ばされる涼。氷川もGM-01で牽制するが木野は苦も無く氷川を殴り倒した。

「ぐあ!!」

「氷川さん!!」

G3のアーマーに破損が目立つ。氷川が持ち出していたGS-03で斬りかかるが木野は受け止める。

「ふん！」

「がは!!！」

GS-03が破壊され氷川の身体のダメージも凄い。

「はああ！」

氷川が吹き飛ばされると翔一のパンチが繰り出されるが木野は受け止め翔一を殴り飛ばす。

「ああ!!！」

「ウアアアオオオオオオオオ!!！」

「ぬん!!！」

「ガアアア!!！」

涼も飛び掛るが殴り飛ばされた。何かしらのパワーアップをした木野に手も足も出ない翔一達。既に身体はボロボロだった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ぐぁ・・・はぁ・・・」

「ハア・・・ハア・・・」

三人は感じていた。長期戦は不利だ。

「こうなったら同時に仕掛けるぞ!!」

「はい!!」

涼の指示に翔一、氷川が一斉攻撃に体制に入った。

シャキ

『GM - 01! GG - 02! アクティブ!』

「グルアアアアアアアアアア!」

翔一のクロスホーンが展開し大地に巨大な紋章が描かれ、氷川は最大の火力を構え、涼の咆哮と共に足のヒールクロウが伸びた。

「・・・面白い」

木野もクラッシャーを展開し大地に紋章が浮かび上がった。

「はあああああああ!!」

「はっ!!」

「グルアアアアアアア!」

ライダーキック、GG - 02、ギルスヒールクロウ、アサルトキックがぶつかり合い凄まじいエネルギーが生まれる。

「ぐ!!・・・ぐ!!!!」

「はあああ!!」

「ぐ!!」

「ぬっっっっっっっっっっっ!!!!」

エネルギーのぶつかり合いを見ていたシャルは・・・

「・・・もしかしたら・・・」

翔一たちに向かって闇の書を構えるシャル。

「ぐあああああ!!」

「氷川さん!!」

「氷川!!」

エネルギーに負け氷川が吹き飛ばされた。G3もズタズタだった。

「ぬっっっっっん!!」

木野が翔一と涼を押し返そうとしたその時だった。

『蒐集』

「「「!!!?!」」」

突如声が響き、翔一、涼、木野のエネルギーが吸収され始めた。

「なんだ・・・力が・・・」

「・・・抜けていく」

「く!!」

魔力結晶体である今の木野は撤退を余儀なくされた。すると、翔一、氷川、涼が元の世界に強制送還された。

「は！」

翔一達が気がつく和海鳴公園に立っていた。変身も解けていた。

「・・・これは」

「おい！なんなんだあいつは!？」

「落ち着いてください！」

考える翔一と訳がわからない言った涼、そして涼を止める氷川。

「葦原さん・・・力が抜けた感じはありませんか？」

翔一の言葉に涼は・・・

「ああ、何となくだが」

「まさか・・・またお二人の力が奪われたんじゃない・・・」

氷川の言葉に翔一は・・・

「いえ・・・前みたいにアギトの力そのものを抜かれた感じはないです」

「言うなら・・・消耗する力を持ってかれたって感じた」

「・・・もしかしたら」

翔一はある仮説を立てアギトの力が回復するのを待った。

一方

「・・・やっぱり」

シャマルが闇の書を見るともう完成間近なほどまでページが埋まっている。

「・・・もしかしたら」

シャマルが見てしまったはやてを救う別の方法。

それは翔一たちの力・・・アギトの力の一部を闇の書に吸収することだった。

第十話 覚醒

レストランAGITΩ

翔一、氷川、涼が集まっていた。

「闇の書か」

「それが今回の事件の発端」

「ええ」

翔一は氷川と涼に自分の知っていることを全て話した。

「ち……久しぶりに着たら……厄介なことが起きたか」

毒づく涼。

「それで……はやくさんを救う方法は？」

「俺の思いついたのは……」

その時翔一の携帯電話が鳴った。

「……そんな……」

はやてが倒れ病院に運ばれた。

石田医師の話ではとても難しい状態だ。シグナムたちははやてを助

けるべく蒐集を急ぐが・・・

翔一は・・・

第十話 覚醒

はやてが倒れた日から翔一はシグナムたちに代わりはやての傍に居た。

「翔一君ごめんなあお店あるのに・・・」

「良いって」それよりはやてちゃんのだ乾いてない？」

「うんまだ乾いてないかな」

今の翔一に出来る事ははやての傍ではやてを支える事だった。

そして月日が流れ・・・氷川やすずか・・・涼とアリサがお見舞いに来る。そして翔一ははやてを支えた。

そして久しぶりに全員がそろう日が来た。

「はやて・・・ごめんね・・・あんまり会いに来れなくて・・・」

病床のはやてに抱きつくヴィータ。

「うっうん・・・大丈夫やで・・・翔一君も来てくれるし・・・元気やったか？」

「めっちゃめっちゃ元気!!」

そしてシグナムが翔一に向いた。

「・・・翔一・・・お前には感謝している・・・主のそばに居てくれて・・・」

「・・・俺は・・・」

翔一の心境は複雑だった。シグナム達の蒐集活動を指を加えて見ている事が・・・だが翔一ははやての傍に居る。そう決めた。

「はやてちゃん。退院したらお店でクリスマスパーティーやるうね」

「うん!」

翔一の言葉にはやてだけではなくシグナム達も喜んでいた。

「ん? 誰か来たのかな?」

ノックが聞こえ翔一がドアを開けると・・・

「こんにちはー」

「こんにちは」

「すずかちゃん。氷川さん」

さすがが何やら悪巧みをしていそうな顔をしていると。

「……こんにちは」「……」

「よっ」

病室に入ってきた涼、なのは、フェイト、アリサ。そしてその姿を見たヴィータの顔が変わった。

「あ、今日は皆さんお揃いですか？」

「こんにちは、初めまして」

「……邪魔するぞ」

「もうちょっと愛想良くしてよ」

涼の無愛想に怒るアリサ。

「あ、すみません。お邪魔でした？」

「あ……いえ……」

「いらっしやい！皆さん」

みんなソワソワしている。正直気まずかった。

「津上さんなんでここに居るんですか？」

なのはの言葉に翔一は答えた。

「うん。俺はやてちゃんちで家政婦さんやってるんだ」

「ところで・・・みんな今日はどないしたん？」

「すずかにはやてが首を傾げると・・・」

「ふふふ・・・」

「えへへ・・・」

「？」

二人のテンションについていけないはやてだが・・・

「「せーの!」!」!」

掛け声と共にプレゼントの箱を差し出した。

「「サプライズプレゼント!」!」!」

「!」!」!」

差し出されたプレゼントに喜びを浮かべるはやて。

「今日はイヴだからはやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「わあ!ホンマか?ありがとうな!」

「みんなで選んできたんだよ」

「後で開けてみてね」

「うん！」

本当に嬉しそうな顔のはやてに翔一は・・・

「良かったねはやてちゃん」

「うん！！」

「みんな！はやてちゃんが退院したらご馳走するよ」

楽しみが出来たアリサとすずか・・・一方翔一は氷川と涼に合図を送った。翔一の合図に頷く二人。

「じゃあ・・・僕達はこれで・・・」

「俺も用事がある」

「ええ？氷川さん帰っちゃうんですか？」

「涼も付き合い悪い！！」

「・・・うるさい」

そう言つと氷川と涼ははやての病室を後にした。そしてヴィータがなのはを睨んでいた。一触即発状態だった。

「ちょっと」

「翔一君何処に行くん？」

「あ、うんジュースでも買ってこようかなって」

「あ！私も行く」

「私も……」

病室を出る翔一の後についていくのは、フェイト。

そして……

「念話が使えない……通信妨害を？」

「シャマルはバックアップのエキスパートだ……この距離なら造作もない……」

「えと……そんなに睨まなくても……」

「睨んでねえです……こういう目つきなんです」

「ヴィータ、嘘はあかん。悪い子はこつやで」

「んん！」

鼻をつままれるヴィータ。

そして夜になると別のビルの屋上に集まる翔一、なのは、フェイト、

ヴォルケンリッター。

「・・・悲願は後僅かで叶う」

「邪魔をするなら・・・はやてちゃんのお友達でも・・・」

翔一は感じた。二人はやるつもりだ。

「ちょっと待って！話を聞いてください！ダメなんです！闇の書が完成したらはやてちゃんは！！」

ヴィータの一閃がなのはに振り下ろされた。咄嗟に防ぐのは。

「はああ！！」

シグナムもフェイトに斬りかかった。

「く！！」

「翔一！！」

シグナムの一閃を翔一が受け止めた。

「邪魔をするな・・・翔一！！」

「けど・・・シグナムさん！！」

「管理局に我らが主のことを伝えられては困るんだ」

「私の通信防御範囲から・・・出すわけにはいかない」

そしてヴィータに殴り飛ばされる翔一。

「ぐあ・・・ヴィータちゃん・・・」

「・・・邪魔・・・すんなよ・・・もう・・・あとちょっとで助けられるんだ・・・はやてが元気になって・・・あたし達のところに帰って来るんだ・・・」

グラーファイゼンからヴィータの悲しみを感じとる翔一。

「必死に頑張ってきたんだ・・・もうちょっとなんだから・・・」

カートリッジがロードされ魔力が噴出す。

「邪魔すんなあああああああああ！！」

「変身！！」

爆発が起ると翔一はアギトに・・・なのははバリアジャケットを装着していた。

「はあ・・・はあ・・・翔一・・・く！！」

翔一を恨めしそうな目で見るヴィータ。

「翔一・・・！！」

「津上さんが仮面ライダー・・・」

翔一の姿を見たのはは驚いている。

「ヴィータちゃん・・・俺は・・・」

「悪魔・・・翔一は悪魔だ!!」

「分かった・・・俺はみんなに向き合う!全力で!!」

翔一が己の持つ最大の力を解放とうとしたその時だった。

「ぬん!!」

「こはああ!!」

「ヴィータ!!」

「ヴィータちゃん!!」

漆黒のコートに身を包んだ男がヴィータを殴り飛ばした。ヴィータは悶絶している。

「木野さん!!」

「決着をつけるぞ・・・そして・・・闇の書を破壊する」

木野は力を引き出す動きを取った。

「・・・変身」

木野がアナザーアギトに姿を変え翔一と対峙する。翔一も木野と決

着をつけるべく対峙した。

「・・・木野さん・・・あなたは一体？」

「・・・俺は・・・魔力で生かされているに過ぎん・・・闇の書を破壊するためにな」

「・・・何故闇の書を知ってるんですか？・・・木野さんを生き返らせたのって！」

「・・・お喋りはここまでだ・・・」

「く!!」

翔一と木野がぶつかり合う。それをチャンスと思ったシグナムは。

「シャル・・・お前は離れて通信妨害に集中している」

「・・・うん」

シャルが後ろに下がる。

「闇の書は・・・悪意ある改変を受けて壊れてしまってる・・・今の状態で完成させたらはやては!!」

「・・・え・・・」

その言葉を聞いた翔一は動揺する。

「我々はある意味で闇の書の一部だ」

「だから当たり前だ！あたし達が一番闇の書のことを知ってた！」
立ち上がったヴィータは翔一を無視したのは、フェイトに襲い掛かった。

「くー！！」

翔一はシグナムたちを止めたかった。しかし今翔一が木野の相手を外れれば誰も木野を相手にすることは出来ない。

「ふん！ぬん！！」

「ごはー！があー！！」

木野の拳が翔一に突き刺さる。

「・・・どうした？お前はあの子を救うんじゃないのか？」

「・・・俺は・・・」

「今のお前ではあの子は救えん！！」

「くううー！！」

翔一はクロスホーンを展開するとライダーキックを放った。

「ぬづづづづづづー！！」

「ぐー！！」

翔一のライダーキックを受け止める木野。

「はあああああああああああ！！」

翔一はライダーキックに全ての思いを込め木野に放った。徐々に押される木野。

「うあああああああああ！！」

「ぐお！！」

木野が吹き飛ばされ翔一は着地した。木野は力なく起き上がり翔一を見た。

「はあ・・・はあ・・・」

息切れしている翔一を見た木野は・・・

「・・・それでいい」

「え？」

木野の言葉を聞いた翔一だがその時！

「え！」

「なに！」

ボロボロの翔一と木野の身体がバインドで拘束される。なのは、フ

エイト、シグナム、ヴィータ、シャルも同じだった。

「これは!？」

「く! 奴か」

「奴?・・・は!！」

翔一と木野が見上げると仮面を被った男が浮いていた。

「・・・やはり裏切ったか・・・木野」

「く!」

「裏切る? 木野さんという事ですか？」

「奴は闇の書を破壊するという我々の目的を無視し八神はやてを救う手段を探していた」

「はやてちゃんを・・・救う？」

「奴が見つけたのはアギトの力を闇の書に吸収させ・・・闇の書を進化させることだ」

「く!」

顔を背ける木野。

「下手に進化したら今以上に危険になる・・・だが・・・」

いつの間にか男の手に闇の書があった。

「いつの間に!」

『蒐集』

「ぐ・・・おおおおお・・・!!」

「木野さん!!」

木野の身体が闇の書に吸収され始めた。

「うぐ・・・ああ!!」

「木野さん!」

「救え!はやてを!うああ!!」

そのまま木野は闇の書に吸収されてしまった。愕然とする翔一。

「く!!」

翔一はバインドを外そうとしたその時!

「ぐ!あ!ああああ!!」

「ヴィータちゃん!!」

ヴィータが苦しみ始めると胸元から赤く輝くリンカーコアが現れた。

「う！ぐ！うああー！！」

「あ！あ！あああー！！」

「シグナムさん！シャルさん！！」

シグナムとシャルからも紫と翡翠のリンカーコアが抜き取られる。

「最後のページは不要となった守護者自らが差し出す・・・これまでも幾度かそうだったはずだ」

『蒐集』

シャルのリンカーコアが輝くとシャルの身体が透けだした。

「こんなもので誰も救えるはずがない」

「ぐ！あああああああー！！」

シグナムとシャルの身体が消えた。

「シャル！シグナム！なんなんだ・・・なんなんだよてめえら！？」

「プログラム風情に知る必要はない」

その言葉を聞いた翔一は力を解放した。

「はあああああああー！！」

翔一の身体紅蓮の炎を身に纏ったバーニングフォームになりバインドを引き千切った。

「ぬおおおおおおおおおおおお!!」

駆けつけたザフィーラの雄たけびと共に同時に跳びかかった。

「温い」

「ぐ!!うおお!!」

ザフィーラの拳が阻まれるが。

「はあああ!!」

「ぐふああああああああ!!」

翔一のバーニングライダーパンチが仮面の男を殴り飛ばした。吹き飛ばされる男。

「貴様……所詮は人間ではないものか」

「確かに……俺や木野さんは普通の人間じゃない……シグナムさんや……シャマルさん……ヴィータちゃんやザフィーラさんも……けど……みんなには思いやる心があつた……お前にそれを踏みにじる資格はない!!」

翔一が再び殴りかかろうとすると再びバインドが放たれた。

「ぐ!!」

「ほざくな」

男は闇の書から膨大な魔力が放たれた。

「ぐあああああああああああ！！」

「翔一！」

ザフィーラも咄嗟に障壁を張り翔一を守ろうとするが、闇の書の魔力に吹き飛ばされ悶絶する翔一とザフィーラ。

「今で闇の書のページが失われた・・・奪え」

『蒐集』

「ぐ！！」

翔一の身体から力が奪い取られる。

「うー！」

翔一のアギトの力を吸収する闇の書のページは使った分を上回るほど埋まっていく。

「がああ！ああああ！！」

翔一がバーニングフォームからグランドフォームになる。

「ついでだ」

「うあああああああああー!!」

ザフィーラのリンカーコアが抜かれてしまった。

「ザフィーラさん!ぐ・・・あああああああー!!」

翔一の姿がアギトから翔一に戻りかけている。

すると翔一の身体が宙に浮いた。

「な・なんだ・・あれは?」

力を奪われながら翔一が見たものはなのはとフェイトと張り付けになっているヴィータそして召喚されたはやて・・・

「・・・まさか」

翔一の頭の中に浮かんだの残酷な光景だった。

「なのはちゃん?フェイトちゃん?」

ヴィータを挟み嘲笑うようにはやてを見る二人。翔一にはわかっていた。二人は偽者だと・・・

「なんなん・・・なんなんこれ?」

はやては訳のわからず戸惑いの声を上げる。

「・・・君は病気なんだよ・・・闇の書の呪いって病気・・・」

「・・・もうね・・・治らないんだ」

「ぐ！ぐ！！」

翔一は脱出するべく力を込めるが力を奪われ続けている今力が入らない。

偽者の二人の残酷な言葉が続く。

「闇の書が完成しても助からない」

「君が救われることはないんだ」

その言葉にはやては。

「そんなんええねん・・・ヴィータを放して!!」

「この子ね・・・もう壊れちゃってるの・・・私達がこつする前から」

「とつくの昔に壊された闇の書の機能をまだ使えろと思ひ込んで無駄な努力を続けていた」

「無駄ってなんや？シグナムは？シャルは？・・・翔一君は!？」

偽者のフェイトが持ち主の居なくなつた衣類を指刺した。それを見たはやては絶望の顔になった。

「・・・壊れた機械は役に立たないよね」

「だから壊しちゃおう」

「や！ダメ！やめてえ！！」

はやてが動かない身体を引きずりながらヴィータに向かって手を伸ばすが・・・

「やめて欲しかったら」

「力づくでどうぞ」

はやての絶叫と共にヴィータが消し飛ばされた。そして翔一がはやての目の前に連れてこられた。

「だ・だれ！？」

はやては初めて見る翔一のアギトの姿に驚いている。二人ははやてを更なる絶望の底に落とす気だ。必死にもがく翔一。

「ねえはやてちゃん」

「運命って残酷なんだよ」

「・・・この化け物の正体・・・見せてあげる」

すると翔一の力の吸収を最大にした。

「うああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

翔一の身体が光り輝くとはやての目の前で翔一は元に戻った。

「が・・・ああ・・・」

「翔・・・一・・・君・・・」

力を全て吸収され蹲る翔一。

「この人ね・・・普通の人間じゃないんだよ」

「人間のふりをしている。ただの化け物なんだよ」

「そんな事ない・・・翔一君は・・・翔一君は・・・」

「もっとも・・・そろそろ死んじゃうけどね」

偽者の魔力が倒れている翔一に襲いかかろうとしたその時。

「あ・・・ああ・・・」

はやての中の何かが目覚めた。

第十一話 闇の書

第十一話 闇の書

「あああああああああああああああああああああ
！！！！」

はやての絶叫が響くとはやてから膨大な闇が噴出した。

「く・・・はやて・・・ちゃん・・・」

翔一が必死に身体を起こしはやてを見ると・・・はやての姿が変わり始めた。

「我は闇の書の主・・・この手に・・・この力を・・・封印・・・解放」

逸し纏わぬ姿となったはやてが闇の書の力を解放した。

『解放』

闇の書の声が響きはやての身体が変化した。黒い騎士甲冑のような物に身を包み漆黒の翼。脱色した髪。鮮血を思わせる瞳。

その姿は墮天使のようだった。

「・・・また・・・全てが終わってしまった・・・一体幾度・・・」

こんな悲しみを繰り返せばいい」

「・・・はやてちゃん」

「・・・はやて」

目の前で起きたことになのは、フェイトは驚いているそして翔一も・

「はやて・・・ちゃん」

フラフラの翔一を見るはやて。正確にははやてだった者は・・・

「・・・違う・・・我は闇の書・・・我が力の全ては・・・主の願いを・・・そのままに」

闇の書が膨大な魔力をひねり出した。

「ディアボリックエミッション」

「空間攻撃!？」

「く!」

なのはとフェイトは咄嗟に翔一を連れ出し離脱した。

「闇に・・・染まれ・・・」

翔一たちが闇に飲み込まれた。

「「「はあ・・・はあ・・・」」」

離脱した翔一達は闇の書を見た。

「まさか・・・津上さんが仮面ライダーなんて・・・」

翔一が仮面ライダーだったことに驚くのは。

「黙ってるつもりは無かったんだけど」

「はやてちゃんが・・・」

翔一は力を引き出す動きを取った。

「変身！・・・変身！！」

力を奪われたせいで変身できない翔一。

「く！」

「津上さん！無理です！」

「けど！」

「今の状態じゃ戦えませんここは私達に任せて！」

「なのはちゃん・・・フェイトちゃん」

「大丈夫・・・私達も仮面ライダーと一緒に戦ってきたんです」

「え？」

なのはの言葉に驚く翔一。

「なのは！」

「フエイト！」

「ユーノ君！アルフさん！」

ユーノとアルフが合流したい策を練った。

（・・・隠れたか）

闇の書は翔一たちの気配を探った。

「・・・主よ・・・あなたの望みを叶えます・・・愛おしき守護者達を・・・津上翔一を傷付けた者達を・・・今破壊します」

そう言うとき闇の書は翼を広げ羽ばたいた。

「」「」「！」「」「」

闇の書の気配を感じ取った翔一たち・・・周囲の気配を感じない。

「前と同じ・・・閉じ込める結果だ」

「・・・やっぱり私達を狙っているんだ」

「まさか・・・あの仮面の人かなのはちゃんとフェイトちゃんに成りすましたのって・・・」

「今クロノが解決法を探してる・・・時間が・・・戦って」

「わかった」

「待って！翔一さん！！」

翔一はやてを救うべく力の出せない身体で闇の書に向かっていった。

「・・・来たか・・・」

闇の書は向って来る翔一と向かい合った。

「・・・戦うことの出来ないお前が何しをに來た」

「俺は・・・はやてちゃんを救いたい・・・けど・・・あなたが皆を傷つけるなら・・・」

翔一は持ってきたフライパンを構えた。

「・・・そんなもので何ができる・・・」

「俺が器用なのは知ってるよね」

「安心しろ・・・主の願いだ・・・お前を傷つけるようなことはしない・・・」

「え？」

「主はお前を兄のように思っていた・・・だからお前と一緒に居たいという願い・・・それを叶える為に」

「その為なら・・・はやてちゃんの心を踏みにじっていいんですか！？」

その言葉に反応する闇の書は・・・

「刃を以って・・・血に染めよ・・・穿て・・・ブラッディダガー！！！」

闇の書のブラッディダガーが翔一を襲うその時。

「く！！」

「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

翔一の前に結界を張るなるのはとフェイト。

「どうして！？津上さんのことを大切に思っているなら・・・なん

で！」

なのはの言葉を遮るように闇の書は構えた。

「咎人達に・・・滅びの光を・・・」

闇の書の放とうとしている魔法に絶句する。

「星よ集え・・・全てを撃抜く光となれ」

「スターライト・・・ブレイカー？」

「貫け・・・閃光・・・」

「なのはは一度蒐集されている。その時にコピーされたんだ!!」

翔一たちが身構えるその時だった。

「一般市民？」

「やっぱり誰も居ないよ！急に人が居なくなっちゃった!!」

涼たちと別れたアリサが混乱している。

「辺りは暗くなるし・・・何か光ってるし・・・」

「氷川さんにも連絡取れないし」

「なんか光ってるし・・・」

「逃げて!!」

駆けつけるなのはの叫びに驚くアリサとすずか。

「なのはちゃん・・・フェイトちゃん」

「・・・アリサちゃん」

「・・・すずか」

お互いの正体を知ってしまったなのは達は気まずい雰囲気になるがアリサはすぐに察した。

「逃げよう!!」

「うん!」

そう言うときアリサとすずかは撤退する。

「スターライトブレイカー」

闇の書から閃光が近づいてくる。

「!!」

閃光が二人を飲み込もうとしたその時二つの影がアリサとすずかを
守った。

「やめるんだ!!」

翔一が闇の書に飛び掛るが闇の書は攻撃を止めない。

「よせ・・・お前を傷つけない・・・」

「けど!!はやてちゃんがこんな事!!」

「黙れ!!」

「ぐああああ!!!!」

闇の書が翔一を吹き飛ばしたその時。

「グルアアアアアアア!!」

緑の戦士が翔一を受け止め降り立った。

「おい!津上!しっかりしろ!!」

「あ、葦原さん!!」

葦原涼「仮面ライダーギルスが駆けつけた。

「ふん・・・雑魚が増えたところで・・・!!!!」

ズガガガガガガガ！！

闇の書に向かって無数の弾丸が浴びせられた。翔一が振り向くと蒼い鎧の戦士が巨大な機関銃を構えていた。

「津上さん！葦原さん！！」

「氷川さん！」

氷川誠「仮面ライダーG3-Xも駆けつけた。

「氷川さん！」

「はい！G3-Xのオーバーホールが終わりました」

「ここは俺達任せろ」

「津上さんは安全なところに！」

「ダメです・・・俺も戦います・・・たとえ変身できなくても・・・はやてちゃんを助けます！」

闇の書に対峙する翔一、氷川、涼。

「いくぞ！」

「はい！」

涼を筆頭に氷川、翔一が闇の書に向かって行った。

「は！」

氷川のGX-05が火を噴くが闇の書は防御結界を張った。

「グルアアアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオ
！！！」

涼がギルスフィーラーで闇の書を攻撃しようとするが回避される。

「ち！すばやい奴だ」

「ブラッディダガー！」

闇の書のブラッディダガーを放つと氷川と涼が翔一を守る為壁になった。

「ぐあ！」

「がは！！！」

「氷川さん！葦原さん！」

すると闇の書が氷川に急接近した。

「ぐああああ！！！」

闇の書に殴り飛ばされた瞬間GX-05を手放してしまった。

「氷川さん！おりゃあああ！！！」

翔一の一撃も闇の書は受け止める。

「ぐあ・あ・ああ」

翔一の腕を締め上げる闇の書。

「グルオオオオオオオオオオ!!」

涼がギルスクロウで攻撃するが再び防御結界で防がれてしまう。その隙に氷川がガードチェイサーからある物を取り出した。

『GM - 01! GG - 02! アクティブ!!』

GM - 01にグレネードユニットGG - 02を装着させ火力を上げた。

「はあ!」

「く!!」

GG - 02の弾丸にダメージを受ける闇の書。氷川はそのままGG - 02で接近しながら闇の書を攻撃した。

「く!!」

闇の書の攻撃が翔一たちを襲ったその時。

「はあ!!」

防御障壁が翔一たちを守った。

「なのはちゃん！」

「はやてちゃん！闇の書さん！止まってください！ヴィータちゃん達を傷つけたの・・・私達じゃないんです！」

「無駄なのは・・・今奴に何を言っても聞くような奴じゃない・・・」

涼の言葉に絶句するのは。

「シグナム達と・・・私たちは！！」

「我が主は・・・この世界が・・・自分の愛する者達が奪った世界が・・・悪い夢であってほしいと願った・・・主には・・・穏やか夢の中で・・・永久の眠りを・・・」

「ダメだ！！」

「なに？」

翔一の言葉に反応する闇の書。

「はやてちゃんは・・・どんなに辛くても・・・現実を生きなくちゃいけないんだ！！」

「・・・主の家族のお前がそれを言うのか・・・」

「俺は！」

「貴様も・・・愛する騎士達を奪った者も・・・永久の間を・・・」

「闇の書さん！」

「・・・お前も・・・その名で私を呼ぶのだな・・・」

「え？」

闇の書の悲しげな顔を見た翔一。そして確信した。闇の書にも思いやる心があることに。

「・・・教えてくれ・・・君の名を」

「なに？」

「・・・名前を教えてくれ」

「私に名など・・・無い！！」

翔一の言葉を振り払うように触手を召喚し翔一たちを拘束する。

「ぐー！」

「ぐああー！！」

「！！！！」

闇の書が手を翳すと涼を掴んでいた触手が涼を叩き付けた。

「ガハ・・・！！！！」

「「葦原さん！！！！」」

「涼さん！！」

「・・・私は主の願いを叶えるだけだ・・・」

「ぐあああああああ！！！！」

「があああああああああ！！！！」

再び叩きつけられる氷川と翔一。

「我は魔導書・・・ただの道具だ・・・」

「じゃあ・・・その涙は・・・」

翔一が見ると闇の書は涙を流していた。

「そうじゃなきゃおかしいよ！！本当に心がないんなら！泣いたりなんかしないよ！！」

「この涙は主の涙・・・私は道具だ・・・悲しみなど・・・ない」

「悲しみなどない？・・・そんな言葉・・・そんな悲しい顔で言つたつて・・・誰が信じるもんか！！」

「あなたにも心があるんだよ！悲しいって言つていいんだよ！あな

たのマスターははやてちゃんは・・・きつとそれに答えてくれる優しい子だよ!!」

なのは達の言葉に闇の書は何も答えない・・・そして地響きが・・・

「早い・・・もう崩壊が始まったか・・・私も時期意識を無くす・・・そうなれば・・・すぐ暴走が始まる・・・」

「暴走？」

「意識のある内に・・・主の望を叶えたい・・・」

「この駄々っ子!!」

フェイトがバルディッシュで斬りかかろうとしたその時だった。

「お前も・・・我内で・・・眠るといい・・・」

「え!!」

するとフェイトの身体が透け始めた。

「フェイトちゃん!!」

翔一が叫ぶとフェイトの身体を光が包みフェイトが消えた。

「ん．．う．．」

フェイトが目を覚ますと何やら違和感を感じた。布団がかけられている。

「．．．え」

フェイトが辺りを見回すと．．かつての自分の部屋に居た。

混乱するフェイトは自分の両端に違和感を感じた。

「ふにや．．．お肉．．」

一人はアルフ．．．そしてもう二人を見たとき動揺した。

「すう．．すう．．」

「くう．．くう．．」

自分と同じ姿をした二人の少女．．．虚無空間に落ちた少女．．．

自分があるとある人物と一緒に弔った少女。

ノックが響いた。

「フェイト、アリシア、フェリア、アルフ朝ですよ」

「！！」

扉を開いた人物・・・それはかつてフェイトに魔法を教えたとある人物にフェイトの居場所を知らせた使い魔・・・

「ん・・・おはよ、フェイト」

「お姉ちゃん、おはよう！」

起き上がるアリシア・テストロッサ、フェリア・テストロッサ。

「みんな、ちゃんと起きてますか？」

「んー眠い」

「もうちょつと寝たい」

リニスたちのやり取りを見てフェイトは更に混乱している。そして・・・食卓に向かうフェイト達。そして驚愕した。

「お母様おはよう」

「母さんおはよう！」

「おはようプレシア」

「アリシア、フェリア、アルフ、おはよう」

優しい笑みを浮かべているプレシアがフェイト達を迎え入れた。

フェイトは混乱の極の中・・・

静に扉が開き・・・入ってきた人物を見てフェイトは驚愕した

・・・フェイトが大好きな人物

・・・そしてフェイトが最も逢いたい人物・・・

「・・・フェイトちゃん」

「おにい・・・さん・・・」

第十二話 深緑の男再び

「ぐー!」

「がああ!!!」

「うああああ!」

「きゃあ!」

闇の書の攻撃を受け続け消耗する翔一達。

「フェイトちゃんまで・・・く!」

「なにか・・・なにか方法は!」

はやて、フェイトを救う方法を探す翔一たち。

第十二話 深緑の男再び

フェイトは驚きを隠せない。家族と共に目の前に居る麻生の姿が。

「・・・・」

麻生は何も言わず席に着く。柔らかい笑みを浮かべるプレシアやヤンチャ盛りのアリシアとフェリア。

「プレシア、困りましたよ。今日は嵐が雪になるかもしれません」

リニスの言葉に笑みを零すプレシア。その姿はどこにでも居そうな風景だ。麻生も笑うだが何かが足りない。

(・・・違う・・・お兄さんは・・・お兄さんは・・・)

フェイトは何処となく麻生が違うことを感じた。だが心細い今の状態は麻生を求めてしまう。

「フェイトどうしたの？」

「どうもなにか怖い夢でも見たらしくて。今が夢か幻かと思ってるみたいです」

プレシアとリニスの会話に違和感を隠せないフェイト。思わず麻生を見てしまう。

「・・・・・・・・」

麻生は何も言わない。さっきから麻生は何も喋らない。それがフェイトにとって心細い。

家族のような雰囲気。そしてプレシアの優しさ。

(・・・違う)

フェイトの中はその結論だけだった。

この世界はフェイトにとって都合が良すぎる。

．．．母が居て．．．

．．．リニスが居て．．．

．．．アリシアが居て．．．

．．．フェリアが居て．．．

．．．アルフが居て．．．

．．．そして

．．．麻生が居る．．．

この空間にはフェイトが求めていた物が全て揃っている。このまま

この空間に留まる。フェイトはそんな事を考えてしまったその時。

「・・・・・・・・」

「え？」

麻生の顔から笑みが消えた。

「・・・・・・・・」

麻生はそのまま席を立った。

「お兄さん！」

「あらあら・・・麻生君どうしたんでしょうね」

「お姉ちゃん・・・勝兄ちゃん・・・どうしたんだろうね・・・」

フェリアの言葉にフェイトも黙ってしまう。

一方

（・・・眠い）

暗闇の中はやては一人だった。

全身に力が入らない。だが心地のいい眠気だけがあった。

「そのままお休みを・・・我が主・・・あなたの望みは・・・全て私が叶えます」

（・・・誰？）

その声ははやてにとって心地が良い。

「・・・目を閉じて・・・心静かに夢を見てください・・・」

（・・・私は・・・何を望んでたんやっけ）

「夢を見ること・・・悲しい現実は全て夢となる・・・安らかな眠りを」

（・・・そう・・・なんか？）

その時。はやての脳裏にある人物の姿が浮かばれた。

（私の・・・本当の望みは・・・）

「・・・あれ？」

草原で寝そべっていたアリシアが暗くなってきた空を見上げる。すると雷鳴が鳴り響いた。

「雨になりそうだね。フェイト帰ろう？」

大木の近くでボーっとしていたフェイトだったが・・・

「ごめんアリシア・・・私お兄さん探す」

「しょうがないな～じゃあ！私も探す！」

「私も！」

フェイト、アリシア、フェリアが麻生を探すと麻生は大木の近くに立っていた。その背中はどこか寂しそうだった。

「お兄・・・さん・・・」

「・・・・・・」

何も言わず麻生は振り向く。そして大粒の雨が降り始めた。

「あ・・・」

フェイトは勇気を振り絞り麻生に話しかけた。

「・・・これは・・・夢・・・なんですよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェイトの言葉を麻生はただ聞いている。

「ねえ・・・アリシア・・・フェアリア・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェイトの言葉に黙ってしまうアリシアとフェアリア。

「・・・お兄さん」

幻想の麻生だとわかってはいるだがフェイトは麻生を求めてしまう。
麻生がこの世界に留まれと言ってしまうえば留まってしまうかもしれない・・・不安と期待がフェイトを駆け巡った。しかし麻生は・・・

「フェイトちゃん・・・君が決めるんだ」

「え？」

麻生の言葉に驚きを隠せないフェイト・・・この世界はフェイトにとって理想的であるはずの世界・・・当然この世界の麻生も自分にとって都合のいい事を言ってくれるフェイトはそう思っていたが麻生は違った。

「・・・お兄さん」

「・・・君が決めたのなら・・・僕は力になる・・・」

「く・・・」

「・・・お姉ちゃん」

「フェリア・・・」

「お姉ちゃんはそのまま皆を見捨てられるの？」

フェリアの言葉にフェイトは・・・

「・・・私は・・・私は・・・みんなと同じ世界に居ない・・・アリシアが生きてたら・・・私も・・・フェリアも生まれなかった」

「そう・・・だね・・・」

アリシアも寂しそうに言った。目の前に居るのはただの夢の住人達。

「ここにいれば・・・母さんも一緒に・・・」

「え？」

「ねえ・・・フェイト・・・夢でもいいじゃない・・・ここにしよう・・・ずっと一緒に・・・私ここでなら生きていられる・・・フェイトのお姉さんでいられる・・・母さんとアルフとリンスとフェリア・・・お兄さんだって一緒に居られるんだよ？」

麻生がいる・・・その言葉にフェイトは戸惑ってしまふ。

「フェイトが欲しかった幸せ・・・みんなあげるよ」

悲願するようなアリシア・・・そして沈黙を保つ麻生・・・フェイトを見続けるフェリア。

フェイトはの答えは・・・

「・・・確かに昔の私なら・・・弱いままの私なら・・・迷わずここで過ごす事を選んだと思う・・・だけどね・・・」

次のフェイトの言葉にアリシアは・・・

「足りないんだ」

ただフェイトの事を見続けた。

「ここにはなのはがない・・・ユーノがない・・・アリサやすずか・・・クロノにリンディ提督・・・それに」

フェイトは麻生を見て言った。

「本当のお兄さんがいない」

「・・・・・・・・・・」

肉体を改造され・・・重すぎる十字架を背負いながら何処かで必死に生きている本物の麻生。目の前の麻生はその言葉を聞いていた。

「お兄さんは辛くても・・・必死に生きてる・・・だから・・・私も必死に生きなくちゃいけない!!」

「・・・フェイト」

「お姉ちゃん・・・」

「・・・フェイトちゃん」

「ごめんね・・・みんな・・・だけど・・・私は行かなくちゃ」

「・・・そっか」

そう呟いたアリシアはフェイトに手を差し出した。

「え？」

「じゃあ行こうフェイト・・・みんなが力を貸してくれる・・・ね！」

アリシアの言葉に・・・麻生が・・・フェリアが優しく微笑み頷いた。

アリシアがバルディッシュを差し出し・・・幸せな夢から脱出を図る。

空間の中プレシアたちがフェイトを見送る。

「また逢いましょう・・・」

「お姉ちゃん・・・またね」

プレシア、フェリアが光になりバルディッシュに吸収された。

「母さん・・・フェアリア・・・」

「もしも来世で出会えたら・・・また私がお姉ちゃんだといいな・・・」

アリシアも笑みを浮かべながらバルディッシュに吸収された。

(・・・)

このまま行けば現実に戻る・・・しかし・・・フェイトは一步が踏み出せなくなった。

(・・・決めたのに・・・どうして?)

迷いだけがフェイトにあるその時だった。

「うわ!」

誰かがフェイトの背中を押した。

フェイトが振り向くと・・・

「・・・お兄さん」

「・・・・・・・・・・」

麻生は何も言わず笑みを浮かべると光り輝きフェイトのバルディッシュに入った。

「・・・お兄さん・・・行くよ・・・バルディッシュ・・・お兄さんの力・・・ザンバーフォーム・・・やれるね？」

麻生の力を吸収し覚醒したザンバーフォームを解放するフェイト。

前に進むために・・・立ち止まらないように・・・

金色の大剣を構えた。

「疾風迅雷！！」

フェイトが空間を切り裂こうとしたその時だった。

「・・・逃がさない・・・」

不気味な声が響きフェイトが振り向くとそこには闇の書がアナザーアギトの姿で立っていた。

闇の書は己が吸収した中でもっとも強大な力・・・アナザーアギトを元に戦士を生み出した。

「お前はここで永遠の眠りに着け・・・」

「く！」

フェイトがプラズマザンバーをアナザーアギトに向けたその時

爆音が響いた

「!!」

ズプリンガーに跨った麻生がアナザーアギトを跳ね飛ばした。

「・・・お兄・・・さん」

フェイトは驚いている。さっき吸収したはずの幻想の麻生が目の前にいることに。

「!!」

フェイトの盾になるように立つ麻生はアナザーアギトを見た。

「私の一部の癖に・・・邪魔をするのか」

麻生はフェイトに向かって叫んだ。

「・・・行くんだフェイトちゃん!!」

「お兄さん!!」

「君の世界だ!!」

「お前は・・・お前は何者だ!？」

闇のアナザーアギトの言葉に・・・

「仮面ライダー! ZO!!」

フェイトを背に麻生は闇のアナザーアギトに跳びかかった。

第十三話 ZO対アナザーアギト

暗闇の中、はやては闇の書に向かって言った。

「私が・・・欲しかった幸せ・・・」

「健康な身体・・・愛する者達とずっと続いていく暮らし・・・眠
ってください・・・そうすれば夢の中であなたはずっと・・・そん
な世界にいられます・・・今抵抗している者とは違います」

闇の書の言葉にはやては・・・

「せやけど・・・それはただの夢や」

そう言うてはやては闇の書を見た。

第十三話 ZO対アナザーアギト

「!!」

「く!!」

麻生の拳がアナザーアギトに突き刺さるとアナザーアギトは後ずさる。麻生は逃がさず連続で拳を叩き込んだ。

「うおおお!!」

「ぐあ!!」

アナザーアギトの拳に吹き飛ばされる麻生。だが立ち上がりアナザーアギトに飛び掛る。

「はああ!!」

「く!!」

麻生は足を掴まれ地面に叩き落された。アナザーアギトの追撃を咄嗟に避けると再び殴りかかった。

「とお!!」

麻生のキックがアナザーアギトに炸裂するがアナザーアギトのカウンターが麻生を叩き落した。

「うお!!」

「お兄さん!!」

フェイトのプラズマスマツシャーがアナザーアギトに降り注がれた。

「何故行かない!？」

麻生の言葉にフェイトは・・・

「ごめんなさい私は・・・夢でもお兄さんを見捨てる事が出来ない!！」

フェイトの言葉の後だった。

「ぐーあー!！」

突然アナザーアギトが苦しみだした。

「どうなっているんだ？」

「私・・・こんな望んでない・・・あなたも同じはずや・・・違うか？」

「私の心は騎士達の感情と深くリンクしています・・・だから騎士

達と同じように・・・私もあなたを愛おしく思います・・・だからこそあなたを殺してしまう自分自身が許せない」

闇の書の声聞いたはやては苦しくなった。闇の書の苦しみどうすればいい？その時はやては体内に違和感を感じた。何か大切な想いが自分の中から湧き上がってくるような感覚だった。

「自分ではどうにもならない力の暴走・・・あなたを浸食すること・・・暴走してあなたを食らい尽くしてしまうことも止められない・・・」

「・・・覚醒のときに・・・今までのこと少しはわかったんよ・・・望むように生きられへん悲しいさ・・・私にも少しはわかる・・・シグナム達と同じや・・・ずっと悲しい思い・・・寂しい思いしてきた・・・翔一君だってそうや・・・せやけど忘れたらあかん」

その時はやてが光り輝くと腰に翔一のベルトが巻かれた。

ベルトが光り輝くとはやては車椅子から立ち上がり闇の書の頬にそっと触れた。

「あなたのマスターは今は私や・・・マスターの言うことはちゃんと聞かなあかん」

はやての決意に応えるように腰の翔一のベルトは輝き続ける。

（・・・翔一君・・・力を貸して！）

「ぐあああ！！」

「きゃああー!!」

「うあああー!!」

「あああああー!!」

なのは、翔一、氷川、涼は闇の書の攻撃に翻弄されるが・・・

闇の書が急に動きを止めた。

「どういうことだ？」

『外の方・・・えつと管理局の方!!』

「はやてちゃん！」

突然響いたはやての言葉に反応する翔一。

『翔一君！まさか！その子と戦ってるの？』

「はやてちゃん！」

『な！なのはちゃん！ほんまに!?!』

闇の書の中ではやての意識が目覚めたことに驚く翔一達。その時ユ
ーノの声が響いた。

『なのは！わかりやすく言っよー!』

ユーノが見つけたはやて達を救う方法。

『そんな方法でもいい！闇の書を魔力ダメージでふっ飛ばして！全力全開手加減無しで！！』

「さっすがユーノ君！！わかりやすい！！」

なのはが信頼できるパートナーの声でレイジングハートを構えると氷川、涼に魔力を施した。

「よし・・・これなら」

「いくぞ！！」

氷川、涼も闇の書に最大の技で応える。

（頼むよ・・・麻生）

（・・・わかった）

アルフのテレパシーを受け取った麻生もアナザーアギトに向かって構えた。

「エクセリオンバスター・・・バレル展開！中距離砲撃モード！！」
レイジングハートから翼が開いた。

「みんなお願いします！！」

「ああ！！」

「はい!!」

翔一の願いに涼、氷川が最大の力を引き出す。

「グルオオオオオオオオオオ!!」

涼の咆哮と共に姿が変わった。鋭利な身体・・・仮面ライダーエクシードギルスの覚醒。

「!!」

氷川はGX-05にGM-01を装着しGX-05ランチャーを構えた。

「はぁ・・・」

闇の書の中の麻生も瞳を輝かせ身体に大自然の力をみなぎらせアナザーアギトに構えた。

「はぁぁぁ!!」

なのはが闇の書の至近距離でレイジングハートのカートリッジを次々とロードする。

「グルアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして涼のエクシードヒールクロウが闇の書に突き刺さった。

「ぐ!!」

動きが取れない闇の書・・・そして

「は!!」

氷川がトリガーを引くとランチャーが発射され闇の書を直撃した。

アナザーアギトがクラッシャーを展開すると大地に紋章が描かれる

「!!」

「とお!!」

アサルトキックと麻生のZOキックがぶつかり合う。

「ぐううう!!」

アサルトキックに押される麻生だがその時。

「プラズマザンバー!!」

フェイトのプラズマザンバーがアナザーアギトに一撃を加えスキを作った。

「うおおおおおお!!」

麻生のZOキックがアナザーアギトを砕いた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

着地する麻生の元にフェイトが駆け寄る。

「お兄さん！」

「・・・」

麻生はフェイトの頭をなでるとそのまま立ち上がった。

「・・・行つておいで」

「行つてきます!!」

ZO・・・麻生に見送られながらフェイトは現実に向かって走った。

「夜天の主の名において・・・汝に新たな名を送る・・・強く支える者・・・幸運の追い風・・・祝福のエール・・・」

ベルトの輝きと共にはやては呟く。

「・・・リインフォース」

ベルトの輝きが闇の書・・・リインフォースを包み込んだ。

「どっとなった!？」

闇の書が光り輝いたその時翔一の身体を光が包み込んだ。

「う！」

身体に力がみなぎる翔一。そして目の前を見るとフェイトが・・・
そして

・・・はやての姿が

一方

「・・・ぐ・・・」

空が光り輝く中、海岸でテレパシーを送り続けた青年は疲労のあまり膝を付いた。青年は空にいるフェイトを見つめた。

「・・・頑張るんだ・・・フェイトちゃん」

青年は海岸から戦いの行く末を見守るのだった。

第十四話 決着

第十四話 決着

「・・・これは」

翔一は純白の魔力の光を浴びていた。その中心の少女・・・はやては・・・

「・・・おいで・・・私の騎士達」

そこにはシグナムが・・・

ヴィータが・・・

シャマルが・・・

ザフィーラが・・・

「我ら・・・夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り・・・我らの魂尽きることなし」

「この身に命がある限り・・・我らは御身の下にあり」

「我らが主・・・夜天の王・・・八神はやての名の下に」

四人の守護騎士が現れたと同時にはやての腰の翔一のベルトが輝いた。

「リインフォース・・・私の杖と甲冑を」

「はい」

「夜天の光よ・・・我が手に集え・・・祝福の風・・・リインフォース・・・アギトの力・・・セエエツトアップ!!」

はやての身体に騎士甲冑が構築される。本来の姿を取り戻した夜天の書そしてベルトの輝きが収まり誕生した夜天の王。

「・・・はやてちゃん」

翔一ははやての姿を見守っていた。

「・・・はやて」

「ん？」

瞳を潤ませながらヴィータははやてを見た。はやても微笑みかけた。

「・・・すみません」

「・・・あの・・・はやてちゃん・・・私達・・・」

「ええよ・・・みんなわかってる・・・リインフォースが教えてくれた・・・そやけど細かいことは後や・・・今は・・・」

はやての言葉。

「お帰り・・・みんな」

「う・・・うわああああん！！はやてえ！はやてえ！！はやてえ！！」

泣きつくヴィータをはやては抱きしめた。

「良かった・・・はやてちゃん」

「・・・翔一君」

翔一は笑顔で一言だけ言った。

「おかえり・・・はやてちゃん」

「ただいま！」

はやては翔一の言葉が嬉しかった。そして自分の腰からベルトを外すと翔一の腰に装着した。ベルトは翔一の体内に吸収する。

「・・・行こう・・・翔一君」

「うん」

翔一が力を引き出す動きを取るとベルトが現れ紫に光る。

「・・・変身！！」

翔一がベルトを敲き付けると銀色に輝いた。

・・・白銀の姿・・・

・・・翔一の最大の力・・・

シャイニングフォームが解き放たれた。

「うわあ・・・かつこええなあ翔一君」

「そう？」

ちよつと照れる翔一。

はやて達の様子に安堵するなのは達。

その時おぞましい姿の巨人が現れた。

「・・・なんだあれ？」

翔一達が驚いているところに飛来するクロノ。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラOUNだ。和んでいるところ悪
いが時間がないのでこちらの話を聞いてほしい」

「時間がない？」

「ああ、あそこの黒い物体・・・闇の書の防衛プログラムが、後数
分で暴走を始める。僕らはそれを何らかの方法で止めなければなら
ない。停止させる方法は現在二つある」

「その方法は？」

「まず一つ目。極めて強力な氷結魔法で停止させる。ようするに氷付けにする。二つ目軌道上で待機している戦艦アースラの魔導砲・アルカンシエルで消滅させる。でだ、これ以外にほかにいい手は無いかな？ 闇の書の主と守護騎士の皆に訊きたい」

少々考え込んでいる一同。

「えっと・・・最初の氷付けにするのは多分難しいと思います。主の無い防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから。それに凍結させても、コアがある限り再生機能は止まりません」

「アルカンシエルも絶対だめだ！！こんなところでアルカンシエル撃つたらはやての家まで吹き飛んじゃうじゃんか！！」

「そ、そんなに凄いの？」

「えっとね、発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲・・・つまり辺り一体をふっとばしちゃうんだ」

「あ、あの！私それ反対です！！」

「同じく！！」

「・・・僕もかあ・・・艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が始まったら、ひがいはそれよりずっと大きくなる」

「暴走が始まると、触れたものを侵食して無限に広がっていくから・

「……!!」

突如闇の書から何か黒い物体が放出された。

「なんだあれ!？」

ヴィータが見るとそれはヴォルケンリッター、翔一、木野の姿だった。

「……まさか俺達を吸収してコピー品を作った？」

翔一の言葉に青くなるのは達。

「……く!今戦力を割いている暇はない!!」

「どうすれば」

その時

「俺達が行く……」

涼と氷川が前に出た。

「葦原さん!氷川さん!」

「僕達は魔法のことは良くわかりません……だったら」

「町に放たれた偽者を倒した方が良い」

「俺も行きます!!」

「ダメだ!!」

涼の言葉に黙ってしまう翔一。

「お前はこの戦いにケリをつける・・・良いな？」

「はい!」

「お願いします」

はやてに見送られながら氷川、涼は転送された。

「シグナムさんこれ使ってください!!」

翔一はベルトからシャイニングカリバーを取り出すとシグナムに渡した。

「これは？」

「もしかしたら・・・あの弓に合体させれば・・・」

「・・・面白い・・・やってみるか？」

「みんな!力を合わせれば・・・きっと勝てる!!」

『おう!!』

翔一達が闇の書に向って飛んだ。

海岸

闇の残響が海鳴に進出する中。

「く・・・もう一仕事か・・・」

青年が闇の残響に向って構えた。

「・・・変・・・身!!」

青年の身体が輝き深緑の身体になると青年は闇の残響に向って走った。

別の海岸

「へっへ・・・なんか嫌な予感がして帰ってきたら・・・こんな事になってるとはねえ」

ベレー帽を被った青年に闇の残響は群がった。

「おうおうおめえら!この変身ベルトが目に入らねえか!!」

ベレー帽を被った青年が闇の残響に向って力を引き出す動きをとった。

「お見せしよう・・・変身!!」

凄まじい風が起ると赤い拳の仮面の戦士が現れた。

「さあって・・・頑張れよ・・・なのはちゃん」

赤い拳の戦士は闇の残響に向って走り出した。

『暴走開始まであと三分!!』

「みんな!一斉攻撃だ!!」

『おう!!』

翔一の号令に全員が全力全開で闇の書に襲い掛かった。

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン!!」

「轟天!爆碎!!ギガントシュラアアク!!」

「剣の騎士・・・烈火の翔シグナム・・・炎の魔剣レヴァンティン・・・光の聖剣シャイニングカリバー・・・」

「刃の連結刃に続く・・・新しき姿・・・今見せよう・・・」

「騎士が誇りと魂に懸けて・・・主に降り懸かる災厄を討ち滅ぼさん!!」

「飛べ・・・不死鳥!!」

「行くよ・・・みんな!!」

それに・・・ただ・・・独り強く

「はっ!ふん!はああ・・・」

「は!!!はああ・・・」

翔一が構えると巨大な紋章が闇の書を包み込んだ。

「ああああ・・・」

翔一の身体からも光があふれ出した。

「全力全開!!」

「雷光一閃!!」

「・・・ごめんな・・・おやすみ・・・響け終焉の笛!!」

なのは、フェイト、はやては翔一の描いた紋章に向かって照準を合わせた。

「スターライト!!」

「プラズマザンバー!!」

「ラグナロク!!」

「「ブレイカー!!」」

「はああ!!」

三人の最大の魔法が放たれ翔一も跳んだ。

「「「はああああああああああああああ!!」」」

なのは、フェイト、はやての最大の魔法が翔一の紋章を潜る事により増幅され翔一のシャイニングライダーキックと共に闇の書を貫いた。

「ぐ!!」

コアが露出したその時。

「うおおおおおおおおおおおおおー!!」

翔一の紋章がコアを包み込みシャイニングライダーキックが突き刺さった。

・・・そして凄まじい光が包むと・・・

消滅する闇の書・・・

闇の書が消滅したと同時に闇の残響が消滅していった。

「やった!!」

ハイタッチするなのは達そして・・・

マシントルネイダーと共立つ翔一の姿が・・・

エピソード

エピソード

あれから時が過ぎた。

裁判、リーゼ姉妹。そして・・・翔一達の処分。今回の事件の貢献人として翔一達の処遇はリンディの手により解決はしたがやはり問題だったようだ。

「・・・みんな・・・遅くなったけど・・・メリークリスマス!!」

とあるレストランで遅くなったクリスマスを祝う八神家。

「みんなお疲れ様」

はやての笑みに席に着いたヴォルケンリッターも笑みをこぼす。

家族と一緒に居るこの瞬間・・・これがたまらなく幸せだった。

「それにしてもなのは奴も大変だったな」

「アンノウンに襲われた奴か？」

「ああ、けどなのはの奴気絶しただけでアンノウンは赤い拳の奴がぶっ飛ばしてっただぞ」

「赤い拳の奴？」

「ああ、『なのはちゃんをよろしく』って言ってた。なのはにその話したらそいつ探したけど」

「・・・よっぽど大切な友達だったみたいね」

「・・・うん」

そしてヴォルケンリッターとはやての目の前に一人の女性が・・・

「ご注文はお決まりですか？」

優しく微笑むウェイトレス姿のリインフォース。

「様になってきたな」

「主・・・」

リインフォースは消滅の道をとろうとしたが奇跡が起きた。吸収したアギトの力がリインフォースを進化させた。リインフォースは独立した存在として生まれ変わった。

「で、今日のメニューは？」

「シェフが」

と言ってリインフォースの前に現れたシェフ。

「いらっしゃいませ」

笑顔で現れた翔一シェフ。

「私夢やったんや。また皆で翔一君のお店で食べるの。久しぶりに翔一スペシャル！」

「かしこまりました♪」

とはやての笑顔に応える翔一。

レストラン『AGITΩ』に笑顔が溢れていた。

「これが私の大好きな仮面ライダーだよ」

「ふん」

とヴィヴィオは興味津々に聞いていた。

「翔一さんとリインフォースさんは？」

「うん今忙しいみたいや」

「ヴィヴィオも仮面ライダーに逢いたいな。来てくれないかな？」

「ヴィヴィオ。仮面ライダーは呼べば来てくれるんじゃないんや。仮面ライダーが来る前に私たちが頑張らないと」

「うん!!」

そう言うときヴィヴィオはまた歩き出した。

（けど・・・逢いたいな・・・仮面ライダーに・・・後知っている人居るかな・・・あ!）

ヴィヴィオの頭に浮かんだ人物。

「ティアナさん!!」

「え?ヴィヴィオどうしたの?」

「スバルさん知らない?」

するとティアナは頭を抱えた。

「・・・どうつせまたキャピトラにいるんですよ」

「キャピトラ?」

「最近出来た喫茶店。カレーが美味しいよ」

「行きたい!!」

「じゃあ・・・行ってみようか」

「わっい」

とティアナはヴィヴィオを連れてキャピトラに向った。

喫茶キャピトラ

「はいカレーライスお待たせしましたあ」

エプロンをつけているスバルが接客対応している。

「スバルちゃんこっちのスパゲッティまだ？」

「あ！ちょっと待ってください！」

現在お昼時ということもありお客さんは満員である。

「ああ！んもう！両替にどこまで行つたの？早く帰ってきてよ」

とスバルは両替に行った店主を呼ぶのだった。

エピローグ（後書き）

かつてミッドチルダで起こった空港災害

一人の少女が取り残され炎の中を彷徨った

そして女神の像が少女の前に崩れ落ちたその時

黒い身体の子が少女を守った。

11人目の男にして仮面ライダー0号

次回リリカルなのは 漆黒の男

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5135o/>

リリカルなのは 金色の男

2011年10月6日03時47分発行